俳諧百筆

日陰蔦

和書門
類 二六七五七
號 一の五
函 五
架 九
冊 五

内閣文庫
和書
類 二六七の七
號 ム
冊 函 一三
架 九

隨筆 十五ノ四

内閣文庫
番號 和 26757
冊數 5 (5)
函號 153 310

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

花逕家文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

一

日うげのうづ〻ゝ年侯侯明うとてうこの事行てふ日
うけれたりと見えて返てうれしがりて申しける夏文

又せうとの申しふうけしあることい古き日みの明けたる
ちゝまつる天の君とをはしめしかうげのつぎやふたる
その日うけのつぎとふ和りてきあめぢくのふしきふて海ふと
えふとのものとくちるものすて古き立人をうりて不拔
おくまてやりうふ和るうひけのつぶはさげうこみとふ
和ちるとし一条の事良の法行るれい芋やすうこみとふ和るし
ちて人ゝえせふこれいうきぎのたすきいるるさうこみぶ
うき山おくの杉の指ちゝよちうつきておくふるとの
ちう糸の少くりてくふきのやうふて色ハ赤白きの
ちうとて入りるそれを主きたの彩ゝのつくな
先ゝ　大芋今ちゝふ大うあ人めいうふひげ乃

淺草文庫

[illegible]

刀劔飾ハ家ニ用ラル太刀ハ金銀珠玉ヲ以テ飾リ威儀ハ為ニ用ラル故サモアリナン欤武士ハ飾ヲ好ハ丁勿レ古ノ名将勇ノ士ノ太刀刀ナトノ今ニ傳リ見ルニ飾ハ鹿相ニシテ又ハ名作也飾ハ美麗ナリトテモ骨ノ切ルヽハナレ飾ヲ好ハ無益ヽ鞍皮ハ粗アリサラノキテ柄巻タル糸革ナトノスベラヌ為メ又握ルテチタヘリノ為ナレヽ粒ノ大小ヲ撰ムヽ勿レザラメキダニスレハヨレ鐔ハ拳ヲ

切ラレヌ為ナレハ能鍛タルヲ用ヘレサリヽ彫スタレタルハ弱ク悪レ其外月貫ヲチ頭セツハハキカ子ナトハ銅ニテモヨレ彫物ナドハ用ニ立ズ又刃ハ本阿弥ガ目利極札ナドヲ頼ミニスルヽ勿レ切レ又物間々アリタメシ物ヲレテ能骨ノ切ルヲ用ベレ今世武士ハ人カラ賤シクナリテ心ハナマリラ刀ノ如ク衣服ナトヲ花麗ニテ人ニ誇ル其風俗ニ應レテ刀モ又ハ鈍キ又ニテ外ノ飾花麗也高金ヲ出レテ作タリト人ニ見セテ誇ラン為ヽ諸事皆如此ノ風俗ニ成リ下レリ虚ヲ専ニシテ實ハ少シ

帝人書ニ朝臣ヲ或説ニ帝ノ人ハ源朝臣平朝臣ナトヽ書ヘカラストニヘリ按此説ハ和哥懐紙書式ハ一途ニ守テニナルヘレ懐紙ニハ四位以上氏下朝臣名衆ヲ書ク五位ハ氏ノ下ニ朝臣ヲ書ズレテ名衆ヲ書テ六位ハ氏モ朝臣モ書ズレテ名衆バカリ書ヒ又書籍ノ奥書ナトニハ五位六位ナリ氏氏下ニ朝臣ヲ書リ丁苦レカラズ懐紙トハ替ルヘレ朝臣ハ氏ヲ離レヌ

姓カバ子トヨム ナレバ也 位署ニハ一位ヨリ以下何位ニテモ氏朝臣名如此定式ナリ

一 講頌 中院通茂卿七十賀記ニ讀師講師発声講頌トアリ講頌ト云ハ講師後ノ座ニテ音曲ノ人或ハ詠吟モヒレツケタル輩各キホヒカヽリテ披講ノ哥ヲタヒレカヒ開テ詠吟スル人是ヲ講頌ト云 石野子 蔵説 ○披講ト云ハ和哥ニフレテ付テ講師ウタフ講師ニ付テ講頌同音ニウタフナリ

一 ゲハウアタマ 増鏡巻五ニ云との西園寺の大とのが相なき給ひしく しのびとて山々寺々修法讀經すべてかずしらずかなしく ひゞきのゝしりけれども つひに十月十二日うせ給ひぬ 文永五年 中略 つきなきの夜 葬送ナリ 御葬送の儀式ありしには人の数すくなく とりけるぞめでたくきよらを尽くしつるかみじかうて中よりもし月のおもかげ見えけれバ外法とかやまつるとてあやしきことぞ 乃入事にてもとの ひとつもとゝりや 東山のほとりなりける所にて

りし人のとりてばかりて後ゟ小柑法のましく ぞんぜき ごとく

按ニ法の外なる法を外法ト云 外道トモ云 外法ハ邪術ノ外法を行ふ者人の頭の上大きに下小さきを取て祭ると云 されバ右のやうなる頭ハ外法を行ふ者の用ゐる也 外法あたまといひ習はしたるなり

一 鸚鵡盃 本草綱目巻之四十六介部ノ集解曰ク鸚鵡螺ノ状如ニ鸚鵡ノ頭ニ可シ作ル杯ニ又曰鸚鵡螺ハ質白ニシテ而紫頭如ニ鳥ノ形ニ其肉常ニ離レ殼ヲ出テ食ス出レバ則寄居虫入居ル螺還レバ則出ツ肉為ニ魚ノ所レ食ハ則殼浮出ス人因テ取之ヲ作ル杯ニ

一 銭五百疋 延喜式春宮式曰凡十二月二日來年雜用料綃三百疋綿七百屯絲五百絇調布一千端鍬一千口銭五百疋御履革四張 皮革二張 文革二張 自中宮ニ請ヒ受ク ○按銭ヲ疋ト云フコト大追物ヨリ出タルコト奇異雜談ニ見タレドモ延喜式ニ銭五百疋ト記サレタレバ上古ヨリノ数目ナリ

一 海月倦海月ヲクラゲトレテ用ゝ誤ゝ本草綱目ニ載ル趣ハ
タヒラギゝ按ニタヒラギハ平貝ナルヘシカヒノ二言ヲ切レバキト
ナルカヒノ切音キトナル

一 古眼今眼予書ヲ見ニ古ノ眼今ノ眼トハコヽヲ謂フ古ノ眼トハ
古書ヲ常ニ多ク見馴テ古代風俗ヲ能ク見認タル眼ヲ
ハゝ今ノ眼トハ今世當時ノ風俗ノミヲ見馴テ古代ノ
風俗ヲハ曾テ見知ラヌ眼ヲ云ゝ古ノ眼ヲ以テ今世ヲ見
レハ今ノ古ニ異ナル事明ニ見ルゝ今ノ眼ヲ以テ古代事ヲ見
レハ古代ノ事ヲモ今ノ俗ノ如ク見成ス故明ナラズ疑シキ事
多クテ解カタシレ譬ハ古書ニ金百兩トアルハ煉金ニテ秤目百
兩ノコトナルヲ今ノ眼ヲ以テ見レハ金子ノ小判百兩ト見ルゝ又古書
ハ丈指トアルハ尾張國ヨリ出シ物ニテ長サ八丈ノ指ナルヲ今ノ
眼ヲ以テ見レハ八丈嶋ヨリ出ル絹ト見ル又古書ニ盃トアルハ土
器ゝ今ノ眼ニテ見レハ朱漆ノ木盃ト見エ古書ニ刀トアル腰刀
ハ三寸ヨリハ九寸ニテツカ一カズナルヲ今ノ眼ニテ見レバ打刀ト見エ今世ハ
ツカ二キツバ八タルカ大小トテサス其大ノコトリ

一 凡如此ノ誤多アルモノ也
ミコノムラ古書ニミコトアルハ巫女ゝ巫ハ群ノ字ニ
ふミこハ巫女ゝ巫ハ群ノ字ニ古歌ニ巫ト書
すもろこしの巫ハ弱ノ字ニ集ニ又巫ト書
ゝ巫深抑小巫法師ハ一ツ
ゝ巫玄群農ゝ西倉村ハ
群集ノ西ハ群ノ字ニ
ハ巫女ハ巫ハ
弟樂群ハ巫女ハ

一 不醉酒藥本草綱目ニ抌膽ノ主治ニ解酒毒ニ上ゝ注ニ
萬寧術ニ抌血漬ニ黍ヲ令人不醉高誘注ニ云ニ抌
血漬ニ黍米麥門冬ニ隔乾ニ爲丸飲時ニ以ニ一丸ヲ置ニ舌下ニ
含ニ之令人不醉也。予カ同僚某抌ノ尾ノ筋肉ヲ

ヲ脆ニテ其尾ノ皮ニヲ継テ冬日頸ニ巻ク予取テ
頸ニ巻テ試ルニ頸暖ナルコト大ニテ温ル如シ是ニテ思フニ
狐裘ハ暖ナルベシ同類ナレハ此ニ記

一 おりくもとゝ詞源氏抄洛中抄洛中おりもの
ふのゝもとゝ略注べ又おりもの初ハおりもの
ヲ初ゝもの切たゝ

一 忌織ノ世俗ノ説ニ酒酢醤油味噌醴等ヲ造ルニモ漆物
ナドスルニモ月水ノ女或ハ男ニモ身ニ織アル者ノ牛ヲ鯛造
クルハ必其物成就セズ食物ハ味変シ漆物ナトハ色変シ
テ快カラストニ傳タリ予ハ如此ノ俗説ヲ信セズ奴婢等
カ織ヲ忌ズシテ其事ヲナサレムルニ其造ル物快ク成就セズ
必織ノ験アリ何ノ理トニコト情難シ必其理アルベケレモ幽
冥ノ理アル故惜ラレザルベ理ヲ以テ強テ推カラズ我智ノ及
ダカキ理アリテ然ルベ是ヲ以諸事ヲ推スニ織ヲハ必忌

ムベキコトヽ 神事ニ織ヲ忌ルコトヽ

一 兼宣旨 大臣ニ任スベキ人ニ兼月ニ何日大臣ニ任ズ玉フ
ヘキ由ノ宣旨ヲ賜ルヲニ云ヒ抄巻一おもてさナ一
月九日ノ日兼宣旨ト云ヒ抄巻一おもてさナ一 同十四日右大臣
ニなりたまふ云ヒ足ラザルヽ任大臣ノ節
會ヲ行テ宣命ヲヨミ大臣ニ任ゼラルヽ○或説ノ兼官
ノ宣旨ヲトニハ推量ノ妄説ヽ

一 矮犬詞 矮犬ヲ此方ノ俗ニチントニハ。チヒサイヌトニヲ畧
レテ・チヌトニ。チヌ。チントニト云ナルベシ。又トントト横ノ音相通ヽ

一 兮字字彙ニ弦雅ノ切歌ノ辭ト注セリ兮字ハ歌ノ助語
ヽ溪父辭ノ歌ニ滄浪ノ水清兮可以濯吾纓滄浪之
水濁兮可以濯吾足ノ類ヽ詩ニモ兮字ヲ用ルコトナリ又
賦ニモ辭ニモ兮字ヲ用タルアリ賦モ辭モウタフ物ニハ非レ
ド歌ニ准レテクチベウレヨリ文章ヲ作リ讀誦カモレロク

作リテ歌ニ類スル者ノ此方ノ記録類聚鑑其外ノ俗書ノ歌ニモアラサルニ分ノ字ヲ助詞ニ用テ書タルアリ誤ノ

一 大行天皇春湊浪詔曰大行天皇万葉集ニ大行天皇ハトアルハ持統天皇ノ御事ヲ称セシノ天子崩御ノ後諡号ヲ奉ラサルウチノ称ノ天安二年八月甲子夜薨大行皇帝ノ於田邑ノ山陵ニト文徳実録ニ見タル則是ノ此大行ノ字ハ漢書ノ文字ニテ天子崩ヲ未有諡号故称大行ト音義ニ見タリ

一 祥師の親王 伊勢物語山科の祥師のみこ山科のみこ此きさきの御母も仁明天皇の皇子人康親王の母と注せり二条家の口説ふいと侍ものなり天安二年十二月十四日女御多賀幾子うせたまへりと三代実録にえんてう寺にてしたまへりと叶のるとし此時祥師親王と申史もあれども

岳親王のたまふと氏親王の皇子大江善岡貞観四年十二月廿七日の奏言に祥師親王と申てまし朝三代実録にえんてう寺にてしたまへりと申上たる所の保親王の兄の親王なり業平の叔父なれい親しく年ゆくもいとれあり此岳親王は大同五年主殿頭にて弘仁に廃せられ承和二年辰飾貞観三年入唐元慶四年唐にて迂化ノ真如親王と共に恵大子と申せし又小栗栖に住ふる所にて山科の隣村なれい山科の保元物語に元慶の時人康親王と祥師親王みうとにやるも使ひ如し又人康親王と祥師親王とは兄弟にて貞観元年五月廿五日出家ノ時ハ出家の者なれい祥師ノ時の出家の者なり多賀幾子の七ヶ月のうちの時ハ出家ノ者なり人康と申流ハ兄弟なるや光孝

一

ちきぶかし　右馬養浪速に見えう
古今集哥服春澄浪速古今集に哥をいれよ
ばかりなくよりうれ詠のむかりそくしおるりゆるる長
と古今に　七といるつまくるのみえ生余の
文ふいえ文尼まるに詠の流や長ふものふなく
ふ詞に於るかりるるに初に後世よ始まと
るるのなれい兼好法師の世代よ此流はやもあい
古今集の後よ拾遺集に再び此哥を撰入れ
られに花山法皇ときこうしのうるるこれは
ばかりまるのふいるくふと哥之ふる世ふぬ別に
だに心りそきまじに引うけりんに武アうよみ人の名を
なげてうけるるき哥とあるこ生本源通親のうける
千倉院升震記ふとまに此哥をとられまいうく
ハ哥屑の沙汰ちくたづ兼好の法よ云出せる

ふそ物語よりのふふふふとそうけるこ生まるこ哥書
りりふい物ふくふとふ初と引草に武アの手りりと巻
ふるむふるるや。真文按のるるふふいふと物と
いふふ紫式アうふ云ふおびえるをみるるくし
物ふふくふいるるで詞のつき至ーうす又古
哥を引ふ詞をいひうてり引へきるるたる武ア
ふ光ええふてまるに定家ふい古人の哥の詞を
改するを好先ら猫古天皇御制に悼ふく
改られりいるまるる

一

直垂　後撰集ひふれこをつうーるる
らちんるきとれいきしとやくしいれい哥
京元浦
任方のきしもいそし切使料もうけよふい
ふとも

とする説に者家ハの直垂ハこのみのまと泊りの
素襖浪波より見うり。真文云直垂ニツはり一ツハ烏
帽子ハひたれ常に着服と皮服とはさる
常服と今一ツハ狩具ひたれとハはる狩具の
ハいふたまて四角ハ用ひてろく神もおきのと
後ろろく神ものふたま生来て生形常服
の直垂ハ似るものひとれ者まれ
ハ侍ふたまいふと畧してひとれものこハ
畧ていふる友常服のひとれと同一者なる
ろく直垂ハ狩具のるとかくなとて常服
の直垂ハ後ハ出来ものたにハ人なるさるさ四ろ
考ろ

一 肩衣　右同書ハ伏見帝の時ハ画れ法然上人
の画ハ伝ハ伝の肩ハ大口の

猶肩ハ見たるもの不ハ少見えたり中後今用ハ後
のハ双紙ハ神ものる直垂とハるハ見えれ
右後世ハ好ハ抄ハ出ハれず。真文云肩衣
の名万葉集の歌貧窮問答見たり

一 上下　ハ云ハ上下一見ハる服と上下と云上下の名
右書記ハ見えたり其文別書ハ抄出ス今畧ハれハ
真文ハ考ハ

一 江坂氏今時江坂孫三郎と云人御勘定ハ休後ハ新
定所留役と兼帯ハる而不ハ下谷ハ徒士町ハ住人伊
勢家の傳ハ受タリトテ軍鑑ハ作ハ由聞及ハ住人ハ
伊勢家の門弟ハ非ス雪ハ知ハ人ナリ幼れ者ハ

一 笠懸　下学集云笠懸最初笠懸ハ射ハ後用ハ皮
的ハ云ハ此書後花園院文安元年ハ書ハ書ハ舊
説ハ笠懸の伝書ハ中ハ笠懸ハ射ハ云ハ

生流行今世

一漢唐若按國校田玄易解體新書凡例曰西洋諸國ノ所稱支那ト者即今清國ノ古邦振旦多稱曰漢若ハ唐ト也元ノ陶元藻ガ輶軒録清廖綸璣正字通序皆稱漢ト又今倣效ニ氏ニ一切稱曰漢ト非東西兩漢之謂ヒ。貞丈云近世此方儒士清国ヲ稱シテ中華ト云誤ヒ中華ト云ハ自國ヲ稱美スル詞ニテ國号ニハ非ス日本ノ人自國ノ日本ヲ賤シテ中花ト云ヘシ何ソ自國ヲ夷ニシテ他國ヲ中華ト稱スルノ理アランヤ杉田氏ガ中華稱ヤスシテ輶軒録正字通序ニ倣テ漢ト稱スルハ善シ

一猫 和名抄ニ和名称古萬ト アリ古代ハ子コヽトヽ云タルヲ後代下畧シテ子コトヽ云上略シテコヽモ云數年ノ老猫形大成尾二岐ニナリテ妖怪ヲナス是ヲ猫マタト云ハ尾ニ岐アル故ナルヘシ近頃或大家ニテ猫妖ヲナスコアリ屋上ニ蘇タルヲ見ミ尾根ヨリ二岐ニ成リト在ト其家臣談リキ侯ヒ人等

一ワザトワザトヽ云ハ詞俗ニハ熊ノ字ヲ用ユ本ハ故字ヽコトサラニトヨム說文。使爲之也トアリ故ノ字ワザトヨムヘシ俗用熊ニテヨシ

一ムヅカシムヅカシトヽ云詞俗ニハ六ケ敷ト書ク本ハ煩ノ字ヽワヅラハシキヽ俗ニ病ノヽヨワツラヒトヽ云是モ病ニテ身躰ノムツカシキヽ

一纔又僅ノ訓ニ字ニモワヅカトヨム又ハツカモヨム古今集ニ春ノ日ノ雪ノ下ニ消ヱワビテ思ヒソメシ我ハ忘レシ

一真男鹿 古事記ニアリ是。ヽヨシカト訓ヲ自タル本アリ誤ヽ

真鹿ノ義ノ詞ナリ サヲシカトヨムヘシ真ノ字サヲ子トヨムヽヽヨシカヽ例キ名目ナリ

一甲ノ字訓 甲カワラ 書談ニトヨミテ頭甲カブト身甲ヨロヒ顔甲ホヽテ手甲テヽ足甲アシヽ等ノ惣名甲冑ト二字連レバ甲ハ身甲

ヨロヒナリ
ドウノ
胄ハ頭甲カブト也東鑑ニハ此訓テ誤ラズ源平盛衰
記太平記等ニハ甲カブト胄ヨロヒト誤レリ世俗此誤隨ヘリ
委細ニ予ガ所著ノ甲胄名考ニ記ス今茲ニ略之ヲ

一墨流　水ノ上ニ硯墨ヲ点シ浮メテユソメクラシテ其墨ヲ
紙ニ移シテ文ヨナスヨ墨流シトハ是上古ヨリアルコト古
今集并十物名ノ部ニ

すみながし　なんぎょうる

春ゝ　ふすまちのしのぶもぢずりたれゆえみだれそめにしわれ
ゆえ　墨流のちぢのいと池けのあきたいと若ゝ
ゆえてもみだれそめにしわれ　墨ちらしてのび
ず硯ニ墨をすりて松やにの形を入くもり交ル又ハ
青松葉をつきたゝらしてゆを加へて汁をまぜり
入るもよし墨を流ふくめて水面ニ墨のされ
を印せる墨ハ水面ニ丸くひろゝり字ふを等の

先ヲ以て墨をとりて池氣をうやして墨の字ふを書く
ゝとき入れハ字ふる墨開き跡を形の等ゝ
ゆゝ入るゝきすゝもやば墨めゝてけふゝのゝ
形ゝるゝを紙と水の上ニ墨めゝて墨紙ゝて移ゝ
それと板ニ張りてゝすゝ行ゝて小きゝを作ゝて
つゝの方ゝて字ふを中ゝ墨ハ或ハ墨の中ゝ
松やにたゝるゝ汁を入ゝるゝ墨ハ或ハ墨ハ
ゝとふも松やにの粉を交ゝ字ふる墨の字ゝ
入ゝるゝ墨ハ全泥ゝ紙ゝゝて後用ゝ
ゝる

一中ゝ云てふゝ方等の所ニ中ゝ云てふゝたゝふゝ
せの川中ゝ云ゝ所ゝ中ゝ云ゝ約めて中ゝ云ゝ
如中ゝ云ゝ音和也ゝ
の川ゝ云ゝ句の文字ふる所中ゝ云ゝ

一古史通新井筑後守源君美ガ所著ニテ我國古史ニ記ス所
事蹟ヲ論辨セル書也舊事本紀伊勢五部書等ヲ偽書
ト知ラズシテ引用タリ歎ベキヿ也古史通ノ讀法ニ曰伊弉諾伊
弉冊兄ト妹ニテ夫婦トナリタマフ是男女配匹ノ始之トエヒ又
葺不合尊ノ御姨ニシテシカモ乳母ニテマシマセシ玉依姫ヲ娶
リテ妃トナシタマヒシトエヒ此餘伊弉諾伊弉冊二神蛭
児ヲ生ミタマヒ三歳ニナルマテ脚タヽズトテ流シ棄ラレシトエヒ之
伊弉冊神火ノ神ヲ産タマフ時ニ神サリタマヒ伊弉諾神ミヅカラ
其御子ヲ斬テ段々ニナシタマヒシトエヒ素戔嗚神父ノ神ニ逐レタマヒシ
ヲ天照太神軍起シテ防ガンシトエラ採テ是等ノ類ハ父子兄弟ノ間ニ
於テ其倫ノ正シキ所ヲ得タマヒシトハ見エズ云云貞丈按ニ謂ヘル所
ノ神ノ所行ハ異國ノ聖人ノ立ル所ノ五倫ノ正道ニ違ヘリ聖人ノ道
ハ十六代應神天皇ノ十六年百濟国ノ儒士王仁ガ渡リ来リシ
時ヨリ傳レリ其以前我国ニ聖人ノ道ヲ知ラザル故五倫ノ

道ハ曽テ知ラズ故ニ五倫ノ道ニ合サル事多シサレトモアルヘキヿ也是ヲ咎ム
ベカラズ然ルニ名教ニ於テ何ノ教トシ鑑戒ニ於テ何ノ戒トスル所
カアルベキトエヒテ強テ五倫ノ道ニ合ヤウニ説ヲ作テ釋キナスハ還テ宜シ
カラズ其マヽニサシ置テ手ヲ付ケサルル直ニテ善シ我国ノ上古神
代教ヲ並シ道ヲ説キタマヒシヿ日本紀古事記古語拾
遺等ニ曽テ見エズ度會神主等ガ偽作ノ倭姫命世紀
ヲ初メ五部書又神令其外後人ノ著述ニ神說ト偽リ教
ノ道ヲ記セル書アリ皆儒道ヲ本ニシテ作リタル者也正直ノ
道ヲ神道トスルナトヽエヒテ一ツノ道ヲ建立シタルハ中古以来ノ事ナ
ルヘシ国史ニナキヿ也我国上古道ハ無シモ王位ヲ奪シ者一人モナシ
今ニ至ルマテ然ル異朝ニハ聖人ノ道有ナガラ君ヲ弑シ王位ヲ奪ヘル
者多シ我國上古道ナシトテ何ヲ恥ルヿアランヤ

一 まくほしと云詞俗ニ見たきゆかしきと云詞雅言ニハ凡
まくほし ゆかしく ほしと云 まくハ覓ノ字又求ノ字をまく

とハいへともかゝることありしハ庭に遺りしもありとしてよさゝく
ありきるこ又かのもまくありきハ遊ひさまてに伝まく侍
しきハせきつまをますありしハめしめ侍りて

一 神代文字

卜部神道書云リ近衛殿ニ天枝子命ノ御筆トテ竹ニ彫付タル文字アリ是神代ノ文字ニテ云云 按是異国上古竹簡ヲ似セテ作タル偽物ナルヘシ

神代ニ文字ヲ何トカルヤ文字アリシナラハ和名ヘル云云

神代ニ文字無之然ルニ巫学家ノ徒神代文字ナリトシテ今モ何某ノ祠ノ宝蔵ニ竹簡ニ其文字ヲ彫タル者幾枚アリ或ハ何某ノ家ニ其文字ウルシニテ書タル簡ヲ蔵テ代々傳来セリナド云説アリ其文字有ルコハアルヘケレモ後人ノ偽作ナルヘシ應神天皇十五年百済國ヨリ阿直岐ト云者渡来テ經典ヲ讀ム十六年同国ノ王仁ト云者召ニ應シテ太子菟道稚郎子ニ諸ノ典籍ヲ教奉リシコ日本紀ニ見タリ然レハ應神天皇十四年マデハ神代ノ文字ヲ用ヒシナルベシ然レモ古事記日本紀古語拾遺等ノ正史實録ニ神代ニ文字アリシコ嘗テ見エス又神代ヨリ應神天皇十四年マテ書簡往来ノコモ見エス書籍ヲ撰タルコモ見エス又ユノ神天皇十六年以後国史ニ神代ノ文字ト漢字ト並ヘ用ヒシ事モ見エス又今日ヨリ神代文字ヲ停メテ漢字ノミヲ用ヰヨト云勅詔モ見ズ文字通用ハ天下ノ大事也殊ニ神代ノ文字ヲ停ルニ勅詔ナキコハアルヘカラス然レハ神代ノ文字有ト云ハ妄作偽説ナルコ明也疑フベカラス俗ニハ三国ト云テ天地ノ間ニ日本唐土天竺ノ三國ヨリ外ノ国ナキト思フユヘ唐土ニモ天竺ニモ文字アルニ獨日本ニ文字ナキヲ耻ル意ニテ此方ニモ神代ニ此國ノ文字アリシト云出セル也

一 講

或問曰講字ハ玉篇ニ古項切習也論也字彙ニ謀也究也告也説文ニ和解也ナドアリ学ヲ講スル講釈ナドニ云ハ其義叶ヘリ今世俗ニ念仏講題目講恵比須講祭礼講ナド云事町家ニアリ此講ノ意如何答曰是ハ学ヲ講スル講釈講ヨリ轉用シタルナルベシ学文ニハ一人ノ師有テ弟子ヲ多ク集テ其教授ヲ受ル也彼ノ念仏以下ノ講モ一人ノ主領有テ同志ノ者多

ノ集テ其事ヲ當ムヿ彼学文講ニ似タレハ轉用傍
通シタルヒ

一 神代事跡神トスヘハトテ別物ニ非ス人ヒ神代トスヘハ
トテ別世界ニ非ス今ノ世界ヒ唯風俗意志等ハ後世ト
相違ナルヘキヒ日本紀古事記等ノ正史ニ記ス処ノ
神ノ事蹟ニ奇怪理外ノ事アリ是ハ疑フ可シ支国
ハ神代ヨリシテ應神天皇十四年ニテハ文字無ヒ神代我国ノ
文字アリントスハ妄説ナリ故ニ神ノ事蹟ヲ記シタル
書籍モ無シヒ唯古老ノ口ヅカラ語リ傳ヘテ
受継トスヒ傳ヘタルノミヒ其語傳モスヒ傳ヘ幾千年ノ
昔語リナレハ語違モアリ覚違モアリ忘レテ漏タル
モアリ事ヲ副タル事モアルヘシ百年乎年以前事ダモ語リ
違聞違ニテ相違有ヲ決ヒザルヿアリ況ヤ幾千年昔神代事ヨヤサテ

應神天皇十五年ニ百済国ノ阿直岐同十六年ニ同国ノ
王仁渡リ来テ始テ我国ニ文字ヲ教ヘタリ其時ノ人文字
ヲ書キ書籍ヲ讀ム事ヲ始メタレヒ自書籍ヲ著述
スル位ニナリシハ數年ヲ歴タル後ノ事ナルヘシサテ自ラ書
籍ヲ著述スルヿノ成ル位ニ至テ始テ神代ノ事蹟ヲ記々
ルヒ諸家ニテ聞傳ル所同カラサルカ故ニ其記ス所同シカラ
サル所ナリ何レヲ実トシ何レヲ虚トセン弦定難シサレハ人舍
人親王日本書紀ヲ撰述シタヘヒシ時モ其実否ヲ定メ
決シ難キニ依テ諸家記録ヲ引キ一書ニ曰ト挙テ其
書ノ文ヲ其ヽニ載セテシタリ正直ナル書法ヒ彼奇怪
理外ノ事ハ取ルヘカラズ捨ヘカラス疑ヲ闕テ其余ヲ用
ヘシ異国ニテモ史記ノ三皇本紀ナドハ奇怪理外ノ事
ヲ記セリ和漢ヒニ大古ノ事ハ大古ノ書籍ハ無ヒシテ
古人ノ談リ傳ヘテ後ニ記スル者ナレバ半實半虚

也ト思フベシ後世ノ人彼奇怪理外ノ事ヲ奇怪理外ニ
非ルヤウニ説ントテ強テ辛強附會シテ詞ヲ巧ニシテ説
ヲ作リ秘傳口訣ナドト称シ国史ノ文ヲ説クニ謎ヲ解
カ如クスルハ大ニ笑フベキ事ナリ又云神ノ事蹟ヲ記
シタルハ日本紀古事記古語拾遺ノ三書ヨリ外ハ無
シ舊事本紀ハ偽書ト又天書アリ釈日本紀ニ引
シ天書トハ違タル偽書ト右三書ノ外ハ皆末書ニテ
後人ノ作ト佛法ヲ交タルモアリ陰陽家ヲ交タルモ
アリ理学家ノ説ヲ交タルモアリ儒道ヲ交タルモアリ
皆造リ物ナリ

一 漢音付呉音 松下見林ノ著ス本朝学原ニ曰漢音ハ
者應神天皇之時始リ矣應神天皇之聰盛聖
異三韓 賜ハ角 受ル化ヲ 称ス西蕃ト底ル貢ニ屬方
物文獻ヲ 十五年 秋八月丁卯 百済ノ阿直岐朝十

千字文ハ梁ノ周興嗣ガ次韻ナレハ應神天皇ヨリ後時代ニ當ルナリ是ハ非ナルヘシ白石ノ考ナリ

六年春二月依ル岐カ之言ニ徵ル王仁ヲ時携テ論語千字文ヲ
未ル仁ノ之先ハ出ル自ニ漢高帝ニ高帝之後ニ曰寔ト寔之
後ハ王狗轉ノ至ニ百済ノ王仁ニ即チ狗ガ孫之應神天皇太
子菟道稚郎子師トスル之ヲ習ニ諸ノ典籍ヲ莫ル不ニ通達ス
此漢音之濫觴之桓武天皇延暦十六年令ニ諸生習
漢音ヲ十七年定讀書ノ音韻ヲ勿用ル呉音ヲ初ノ應神
天皇遣ニ阿知ノ使主ヲ於呉ニ仁德天皇雄略
天皇ノ時呉國貢獻ス呉音之譯ス於ル古人ニ亦尚矣然
自ニ欽明天皇ノ朝佛法入ル後百済法明来リ于ニ對馬嶋
呉音ニ誦ス淮摩ヲ謂呉音ヲ爲對馬讀ト者是ト彼詞
如ク支遁ニ終遇ス于ニ内大臣鎌足ニ申テ是欲佛書之呉
詰ニ也故亦讀ニ儒書ヲ者禁呉音ヲ須ル漢音ヲ正ス
始ヲ也大内大學寮有音博士ニ人掌ル教ル音ヲ明経
生必先就テ音博士ニ讀ム五経音ヲ然後講ル義ヲ持説天

支道字道林
晉僧講維摩經

三傳者左氏
公羊傳穀梁
三礼者周礼
儀礼 礼記

皇賜ニ音博士大唐續守言薩弘恪銀及沓ヲ仁明天
皇能練リ漢音辨ス其清濁朝野宿 赤鹿取知 漢
音善道朝臣真貞以ニ三傳三礼ヲ為業ト兼能ス談
論但舊来不学漢音ヲ不辨字ノ之畢ヲ至テ教授總テ
用ニ世俗騎馭ノ之音ヲ斯人ニ而有ニ此不能之爲遺憾耳
○貞文曰右日本紀續日本紀水鑑続日本後紀等ニ見タリ我朝
漢音ヲ正シク兼ケ傳ヘタルヿ右ノ文ニ言ルカ如シ大学寮ノ博士世
々其漢音ヲ習ヒ傳ヘテ後代惺高先生林道春等ニ及マデ
二相兼シ来レリ漢正音ハ変セズシテ我朝ニ遺リ傳レリ然ルニ近
世ノ腐儒ハ右ノ漢音傳来正シキヿヲ知ラズ漢音ヲ賤メテ
倭音ト称シ今肥前長崎ニテ譯士ノ云所ノ清朝ノ音ヲ卒音
ト称シテ彼国唐虞三代ノ時ヨリ以来ノ正音ナリト思フハ誤ル
彼國宋朝蒙古人起テ宋ヲ亡シ國ヲ奪テ國号ヲモ改
テ元ト曰フ此時蒙古人国中ニ充満シケレハ一タビ蒙古ノ音交

テ舊音変シテ訛音ヲ生ス其後明朝韃靼人起テ明ヲ亡シテ国ヲ
奪ヒ国号ヲ改清ト曰フ此時韃靼人国中ニ充満シケレハ一タビ韃靼音
交テ舊音再変シテ訛音ヲ生ス終ニ今俗ニ云フ所ノ唐音ニ云フ音ニ
成テ我国ニ兼ケ傳ル所漢音トハ違タル音ト成レリ然ルニ我国ノ音
ハ漢音ノ正音ヲ或儒士某カ書ニ漢音ト云ハ菅家ノ音江音ナルヘシト云
ト云ハ江家ノ音ノ菅音江音ナルヘシトスシハ腹ヲ捧テ笑ヘシ菅家江
家ニテ字音ヲ異ニセントスルヿ我国史書ニハ曾テ見サルヿ此国ニ生
シ此国ノ故実ヲ知サルハ腐儒ト云ヘシ

一 漢語抄 楊氏漢語抄ハ和名抄ニ引ル此外ニモ漢語抄ト云書アリ
和名抄序ニ適可決其疑者辨色主成楊氏漢語抄ヲ為其餘ノ
漢語抄不知何人撰世謂之ヲ甲書或呼テ為業書ト○貞文
云今世桑氏漢語抄ト云書有信ト難ニ本ニハ桑字ヲ楊字ニ作タ
ルモアリ疑ハシキ者ノ諸漢語抄ノ忠寄説ナリ

一 秘詞水綿襁鈴秘詞延喜式ニ見タリ六月晦日十二月晦禁中ノ

大祓詞アリ是ハ中臣祓詞中ニ少詞ヲ補加ヘヌ少略セシ所モアリ祓ハ
身ニ悪事ヲナシ正シカラヌコトヲスル身穢ヲ故悪事ヲ祓ヒ除キ穢ヲ
清メテ神事ヲ行フ祝部ヲシテ祓ヘスルヒ自身スルコトニ非ス然ルニ今
世神主ナドガ神前ニ向テ祓詞讀ムハ何ノ為ヤ神穢ハナケレバ祓奉
ルニ及ザルコトヒ是祓ノ本意ヲ辨ヘズ唯讀物ト心得テ僧ガ佛前ニテ
佛經ヲ讀ムヤウニスルヒ又祓ノ唯一遍ヨムモノヘ禁中大祓スラ一遍
外ハヨマズ然ルニ後代ニハ千度ノ祓万度ノ祓ナドヒコアリ是又佛家
ノ百万遍ノ念佛千巻陀羅尼千部万部ノ法華経ナドヤウニスルヒ
スルヒ水引綿ハ大殿祭ノ祝詞ニ皇御孫命朝ノ御膳夕ノ
仕奉流 此礼懸伴ノ渚ハ神ノ御膳仕ヘ
奉ル女ハ領巾ヲメテ神ヲ拝ケ御食ヲ造ル男ハ襷ヲメテ神ヲ拝ル
ヒ伴渚トハ後人ノヒヒ水分神ノ祭ノ祝詞ニ弱肩ニ太多復支
ユトヨム注 ハリハ齋ノ字ヌ 取掛底持由麻波利仕奉礼留幣帛ヲヒミ御食リミニ限ラズ神
事ニ牛ヲ使フ人ハタスキカクルヒ如此牛ヲツカフ人ハ襷ヲ掛ルヒ

サモナキニ襷ヲ頭ニ掛ハ無礼ヒ然ルニ今世神主水引綿タスキヲ頸ニ掛ケ神前
ニ向テ祓ヒヒ祓ヲヨムニ牛ヲ使フヒナケレハ襷及ナルヒナヒタスキヲ肩ニ
掛ルハ是僧袈裟ヲ掛ルヒ子ヲスルヒ神前ニテ鈴ヲ振事其來由ハ記
古事 記古語拾遺令延喜式等ニ見エス但古語拾遺ニ熊
太神窟戸ニ入リタヒシ時天鈿女命牛ニ著鐸ノ尻ヲ持テ舞
タヒヒヒ見タリ是ハ尻ノ飾リニ付タル鐸ヒ是舞具ナレバ神前
テ振ル鈴ノ古例ニハ用難シ今祓ノ詞ヲヨミナカラ時々鈴ヲ振リ鳴
スハ僧ノ佛経陀羅尼ナドヲヨム時金剛鈴錫杖ヲ鳴スヲヘ
子タルナリ神代ニ文字ナケレハ弁リ礼ナドモナキヒ日本紀古事
記古語拾遺ナトニ守リ札ノ事見エズ今世神主祈禱シテ
守リ札ヲ造リ朱印ナド押シタルヲ贈ルヒモ修ノ験者ノヒ子ヲ
スルヒトカク佛法ヲ入帰依スルカウヤミキト見エタリ又後代神主カ
神前ニテ印相ヲスルヒオノコロ嶋印八尋殿印日月星印ナドアリ是ヒ
佛法ノヒ子ヲスルヒ神代ニ諸神印ヲ結ヒ玉ヒシヒ上古神史ニ曾

テナシ神道家ノ深秘ナドヽ云コトモ上古書ニ見ヘサルコトハ私説妄説之
信ズルニ足ラズ又加持勧請護身ナドヽ云コトモ佛家名目之
両部ノ神道ハ本地垂跡ヲ説テ神ト佛ヲアハセニシテヘタルナレハ
是ハ云フニモタラズ唯一ノ神道ト称シテ佛法ヲ厳(キビ)シク忌ミナガラ佛
法ノ事ヲスルコト多シ詞ニモ佛家ノ詞ヲ云フコト有リ神主等カ神
前ニ向テ佛者ノ事ヲシテサヘノ祭ハケヨ尽スヲ神慮ニハサゾヲ
カシクオボシメスラン神ナレバコソ目ニモ見エ子人ナラハコラヘカ子テ吹出
神主ガ顔ハ唯マシレニナルベシ

一 薏苡子(ヨクイシ)ノ訓 薏苡子ヲ糸ニテ貫キ珠数ノ如クシテ小児玩弄ス俗
ズズダマトモ云フズズハ珠数ノ古語ニテ拾遺ニ薏苡字ノコト見タリ其書ノ
撰者齋部廣成ノ自註古語ニ薏苡ヲ曰都須(ツズ)ト見タリツズトハ古
名ニズヽダトハ後代ノ名ニツズトズズトカナヅカヒ混ズルコト勿レ神代珠
数ト云物ナケレハズヽダマノ名ハナヽシズト云ヘシ之和名抄ニモ薏苡和名豆
之太万トアリヅヾタマニツノ字ヲ用ヒ給ヘラハニケレバ記之

一 大臣大連是ヲ官名ノ如ク職原抄ニ記サレタレ臣ナニハアラス大政(オホマツリコト)ヲ司ト
ル人ノ臣ノカバ子ナルヲバ大臣(オホオミトヨムヘ)オホオムトト云ヒ連(ムラジ)ノカバ子ナルヲハ大連(オホムラジトヨムナリ)
ト云ヒシ也是加茂ノ真淵ガ説ナリ○貞丈云大ハ貴ベル称ナリ

一 中臣中臣ニ三ツノ品アリ一ツニハ職ノ称ナリ神ト君トノ中ニテ事ヲ司ル
人ヲ中津臣ト云ナカツカミヲ約メテナカトミト云ツオヲ約ムレバトナル之
是ハスベテ神事ヲ司ル職ノ中臣也二ツニハ神祇官ニ侍テ禁中ノ神事ヲ
司ル中臣ニハ大少ノ字ヲ副ニ大中臣ト云中臣祓ノ詞ニ大中臣トアルハ是之
諸社ノ祭ヲ司ル中臣ト差別ヲナシテ貴ブ称ナリ是ハ職ノ中臣之三ツ
ニハ氏ノ中臣アリ天児屋命ノ裔ニテ神代ヨリ神事ヲ司トリ後ニ中臣
ヲ以テ氏ニシタルナリ其中臣氏ノ中ニ中臣ノ清麿称徳天皇ノ神護
慶雲三年ニ大中臣朝臣姓ヲ賜リシト之是ハ中臣ヲ被詞大中臣ト云
アルニ依テ賜リシト之続日本紀ニ見タリ是モ加茂ノ真淵カ説ナリ

一 吾国事失古風神代ヨリ応神天皇十四年迄ハ上古国ノ伝リテ
改リ変スルコトナシ彼天皇十五年百済国阿直岐(アナキ)来リ同十六年同国王仁

来リ文字始メテ行ハレテヨリ漸ク風変シ始リ外國風イヤヲ入交リ
欽明天皇ノ御宇佛法渡リテヨリ天竺風移リ後盛ニ行レテ漢
土風ト三韓ノ風ト天竺ノ風ト入交リ又文武天皇御宇ニ至テ朝廷ノ
制度伐物専ニ唐風ヲ用テ我カ國風ヲ改メラレニ依テ弥古風ハ変レタリ
故ニ吾國上古ノコハ皆以テ明ナラス

一

エビストヽ名月エビス又エミシヒヽ音相通ヘエビスヲ中略スレハエスヘ
ストヽ音相通ヘエス轉シテエソトナル蝦夷ノ嶋ヲエソトヽハ足ヘ
上古ハエミシトヽシヘエビストヽハ常ニ異ナル物指テヽ名ヘ蛭児命
三歳ニテ足タヽザリシトヽ常ニ異ナルガユヘエビスノ神トヽ傳タリ食盤
食物載ル臺ヘヲ人前ニ居ルニハ横枝ニ居ルハ常ヘ誤テ堅枝居ヲエビ
俗ニ膳トヽナリ
ス膳トヽモ常異ナル故ヘ紙端裁残リテヒ出タルヲエビス紙トヽモ
常ニ異ナルヒヘ夷蠻戎狄等ノ文字エビスト訓ヲ付タルモ外國人物
漢國ト異ナルガ故ヘ漢人ハ和人ヲ夷トヽフ
和人ハ漢人ヲ見テ我ト異ナルガ故ニ漢人ヲエビストヽ彼ト我ト相
互ニヽフ

一

詞然ルニ和國ニ生レタル儒者カ和國ヲ指テ夷狄トヽフハ自ラ我國ヲ
夷ニスルヘ聖人道豈 如此事アランヤ
神代文字此事既ニ論ス此條ト三考スヘシ本朝字原ヲ注釋
セル浪華抄ハ尾張住人真野時縄カ所述ニ此偏ニ本朝神代文
字アリシトヽ説ヲ執セリ其抄ニハ神代文字豆齊部ト部書ニ見
エテ亀ト始ル本致アリ今遺憾ニ残リ往年久我東愚ハ牛書ヲ
相傳ハ此外三百六十五字已上ノ説諸抄ニ見ヽ漢字ヲ以テ併古字
不行故ニ世人半信半疑スヽ自文齊部ト部書トモ神道ノ
事取遠タルコアル故吳書ニ神代文字事アルトテモ證トスルニハ足ラズ
又神代ノ文字ナリハ占書モアルヒシト書ナリハ亀ト吉凶悔吝ヲバ
何ニ依テ分事亀トアルカラハ文字アリシヲ推テ知ヘシトヽ説ア
ルハ誤ナリ神代亀トハナシ亀トハ欽明天皇十四年ニト書ヲ百済
國ニ求メ至ヒシヲ日本紀見タリ是ヨリ亀ト我朝ニアリ神代ノ占ト
鹿ノ肩骨ヲ婆迦ノ枝ニテ焼テ古フコアリ古事記日本紀等ニ見

タリ大占ハ文字ナクテモ占法アリシトシ其点法ハ絶タリ又神代
ノ文字久我東愚公ノ手書アリトモ證ニハナラズ東愚ハ神代
人ニ非ス偽字ヲ手書セラレタル物何ノ證トスベケンヤ信スル足ラズ古
語拾遺曰蓋聞上古之世未有文字貴賤老少呂相
傳テ前言往行存而不忘云云是神代無文字ノ明證ニ然
ニ後代ノ書ニ神代文字アリシトイフコヲ記セル書多シ妄説ノ
出雲大社尾張ノ熱田ノ社神代文字ヲ漆書シタ竹簡數多ア
リトイフ是其巫祝好事ノ徒ガ神代文字アリシトイフ説ヲ実ニセシ
ト欲シテ密ニ其竹簡ヲ偽作シテ神庫ニ納ノ置タルナリ神代
文字ノ和名ヲハ何トイフタルヤ文字ナケレハコソタモツタハラス
呉泰伯徐福日本人ハ呉泰伯子孫ト云支泰徐福書
ヲ持テ日本ニ来ルトイフ支異國書ニ載タレ共朝ノ國史ニ見ザルコナレ
バ信スベカラズ然ニ近世儒士異國ヲ貴ビテ中華中土ナド称シ日
本ヲ夷狄トイフヒ倭俗ナド賤シムル不義ナル徒ハ彼泰伯徐福ナガ

車ヲ実ニセントト欲シテ吾朝國史ヲ信セズシテ異國ノ雑書ヲ
信ズルハ誤レリト謂ツベシ取ニ定ラザル見識ナリ

蜷川日々記一名親元日記共云一本ニハ外題ニ殿中日々記トアリ

殿中ノ二字ハ除シ文明寛正ノ間ノ日記此日記予ガ家ノ口傳
ヲ聞サル人ハ此日記ヲ見テハ不審コト多カルベシ其ハ傳ハ蜷川氏
ハ予カ先祖伊勢守代々ノ官ノ被官人ニテ家僕ノ如ク仕ヘタリ伊
勢守代ハ京都將軍政所職補セラレ蜷川代々政所代ニ
補セラレ是政所ノ支ヲ行フ役ナリ右日記蜷川新右エ門
ノ尉宮道親元ガ伊勢守カ家支ヲ書タル日記ノ公方
事モ少ハ交レリ上様トアルハ將軍ノ御臺所ノ御方御
所様トアルハ將軍ノ御嫡子ノ部屋住ノ御方住居トイフコトヘ貴殿トアルハ伊勢
守貞宗ノ兵庫助殿トアルハ貞宗ノ嫡子貞陸ノ御私ア
ルハ公方ニ對シテ伊勢守支ヲ云御父御母トアルハ將軍家内々
ニテ伊勢守夫婦ノ支ヲ御父御母称ラル父母ニ准シ給フ尊

氏公ヨリ由緒アリテ代々如此称シ来ル他家ニテ知サルコト実ノ御
父ヲハ大御所ト云実ノ御母ヲハ大方殿ト云分レサルコト備中守殿
後ニ入道シテ常光ト云
喜公トアルハ是ナリ　同幡守殿駿河守殿子一殿下総守殿肥
前守殿ナトアルハ皆伊勢守同氏ニ正実房定泉房トアル
ハ御倉法師ニ将軍家御倉ヲ預ル入道ニ此外云尽サレ
ズ右ノ支共ヲ知リテ見ザレハ日々記ハスメヌ書ナリ

一　殿中将軍家ノ御所中ヲ殿中ト云殿ノ音スミテ唱スレト予先
祖貞衡記置ケリスミテ唱ハ京都将軍時名月ニ今ハ世人ニ
ヨリテ唱ナリ

一　神道日本紀用明天皇紀ニ天皇信仏法尊神道孝徳記
尊ニ仏法ヲ軽ニ神道ヲ二字此ニ始テ見タリ是ハ神祇崇メ祭
ルコトヲ神道ト云ヘルヒ文ヲ対ニセンガ為ニ法ノ字ニ対シテ道ト
云ヒ中古以来正直ノ二字ヲ宗旨ニシテ建立シタル神道ト云
一道トハ同シカラス中古以来ノ神道ト云ハ正直ノ二字ヲ宗旨トシテ

神道教道ナリト云ハ三社託宣ト云偽作ヲ本経ト云ル教ナリ無
住法師梶原景時ガ孫ナリ　ガ沙石集第六下正直之人室ニ得ルコト條ニ云
聖徳太子御詞ニハ謀計ハ雖為眼前之利潤終ニ当仏神ノ
之罰ニ正直ハ雖非ト一旦依怙ニ蒙日月之憐ト見ヘタリ此文
後人少シ替ヘテ天照太神ノ神託トシ八幡大菩薩春日大明神
ノ神託ヲ新ニ作リ添テ三社託宣ト号ス其文甚拙ク三社託宣
ノ詞仏者ノ口氣アリテ穢ハシ両部神道ト云者偽作ニ又神令ト云書アリ
是モ神ノ教道ニト云テ儒道ヲ以テ教ヲ書キ其文詞ハ祝詞ノ
如キ辞ヲ用テ偽作シタルヲ信スルコト勿

一　一休和尚蜷川新右衛尉親元日記云文明十三年辛丑十月廿日
壬辰天晴一休和尚八十八歳於城州薪ニ涅槃ス是ヲ以テ推ス
ニ一休ノ誕生ハ應永元年ニ後小松院御宇将軍義持公家
督ノ年ニ

一　伊蒲冊尊イザナミノミコト、訓此冊ノ字字書韻書ヲ考ルニナミ

ト訓ヘキ義ナシ王篇楚責切之簡小補會初見切所
晏切俱柵或ハ作冊トアリナレト訓ヘキ字註ナレナミト訓ヘキ字
ハ再ノ字ノ主篇千代切函重ノ仍ノトアリ兩ハフタツノ重モ
ニツアルハ宣ナルノ仍ニモニツアルハ彼ト是相仍ルノニツアル物ナラフ
故ニナミト訓ヘキノ義ナリ然レハ伊幷冊尊ト書ヘキ再ト冊ト字
形相似タル故誤テ冊ノ字ヲ書タルノ傳寫ノ誤ヲ改ズテ用来ルノ
神書ノ字ハ百万ハ要ハ尋ハ十氏人ノ類ノハ數目ノハ非ズイヤト
云ヲ略シテヤトスルトハ字ノ訓ヲ備ヘテ書タルノ是加茂真岡カ說
ノ貞丈按詞ニ付テハハノ訓ヲ借リ用フ義ヲ以テハ彌字ヲ用ヘシイ
ヤハイヨヽヽノイヨヽトスハヤスヽトスハヤ同シサレバ祝シテヤトスハシ
ニハヤノ訓ヲ借リテ用ルノ或說ニハハ神道ニテ貴ノ數ヘトスサレ數
トスルハ悪シ彌ノ事トスヘシ一說ニ初メ下終ノ十ヲ除ノスレハ残數
ハツノ初モ終モナリ無窮ナル故八千代八百万ナトヽスヘシト此
說モ數テ拘リテ宜カラズ又理說ノロハイヤノ略也トスハ字ノ借ル

一

トスハ善シ
天津金木中臣祓ノ詞ニ天津金木乎打切末打断氏トアリ
山崎宣加ノ說ニ天津金木ハ小木ノ枝ヲ云ト云ヘリ中比ヨリ天子ノ奉ル御釜木ノ類
ハ小木ノ枝ヲ金木トスルトヽ云ヘリ貞丈云木ノ枝ヲ短リ打伐タルハ薪ノ如シ御薪ト書
トヽ云ヘリ貞丈云木ノ枝ヲ短リ打伐タルハ薪ノ如シ御釜木ニテ釜ノ下ニ焼ク薪ヲヘテトナト
テミカヽギトヨハミカヽギハ御釜木ニテ釜ノ下ニ焼ク薪ヲヘテトナト
音相通ナル故カヽギヲカナキ氏云ナルヘシ又和名抄見ヲ阿之賀
奈倍釜ヲ末路賀奈倍トアリ然レハ薪ヲカナ木ト云ヘシ
カナキハカナヘ木ノ略詞ノ是ノ義モ亦通セリカナヘノナヘヲ約
レハ音子トナルナヘ切子トナト音相通ユヘカ子ハ子トナルテカナトナル
依テカナ木ト云是義モ亦通セリカナヘ木ノ畧カナ木ト云
方易リテヨリキヨ
尼假字平假字先後アイウエヲノ五十音ハ吉備公ノ作ハ云
傳フ是真字ノ偏傍冠履ヲ省略シテ共片躰ヲ取用シ
故片假字ト云ヘいろはノ僧空海ノ作ト云傳タリ是草

書ヲ更ニ大ニ略シタル者也平假字ト俗ニ唱ルハ其畢筆平易(ヘイイ)ナルガ故也時代ハ先後ハ吉備云ハ先ニテ空海ハ後也片假字ハ先ニテいろはハ後也其證いろはの中、ヘリツノ三字ハ片假字ノヘリツヲ取ヲ用タリ然レハ片カナハ先ニテ平カナハ後也ト知へし

一 存ノ字俗諺ニ思フ事ヲ存ズルト云知ルヿヲ存知ト云存字ノ訓ニ思フノ義ナリ又知ルノ義モナシ按ニ存ハ亡ニ對スルノ詞物ヲノ存セザルヲ亡(ウゼル)ト云亡サルヲ存ト云サレバ思フ事ヲ心ノ中ニウセズシテアルヲ心ニ存スルト云也王篇ニ存ノ字ノ註ニ在也アリ存知ト云モ心ノ中ニ知ルヿノ在也心ニ存作リハ心ニ存知候ト云ヘキヲ心ノ字ヲ略シテ云ユヘ義通シ難キ也俗諺此類尚有へし

一 無病之称無恙ト云ハ無病ト云ニ同シ俗ニ機嫌能ヲ勇健堅勝堅固息災無事ナト云ハ無病ノ義ニハ當ラス 祠也サレ圧近世俗ニ右ノ詞ヲ無病ノ事ト言習ハシ且貴賤ニヨリ其詞ニ階級ヲナス是今時ノ風俗也此等ノ事ニ論ヲ立テ正(サン)サントスルハ却テ愚也今世ノ俗事ノ俗ニ随テ世ト共ニ推移ルヘシ害ナシ

一 書記官之訓 諸官ノ内書記ノ官名其官ニ依テ文官ハ各異ナレ圧何レモサクハンシト唱フ何ユヘサクハンシト云フヿ知レズ按ルニ冊(サツ)官又ハ策官ナルヘシ冊モ策モ物ヲ書付ル簡ノヿナリ即チ書籍ナリ

一 一休和尚歌 世の中はくふてくそしてねておきて扨其後はしぬるばかりぞ 一休和尚ノ歌ヲ[illegible] 又これ[illegible]云九[illegible]細[illegible]人の一生ハ食てくそして寐て起るのみかはなくなるも多かるへし 其ふるまひをつらつら思ふに士農工商各其家業を勤るハ食てくそして寐ておきて其上ニて死ぬへきものなり若家業をつとめず家業をも勤めずして動かさず人の宝を見たのみにて好色たる[illegible]特[illegible]して一生を送らんとするものハ道路に倒れ死するの輩にて

死すること成へし

一 崩薨今ハ崩薨ノ差別ヲ挙ラレタル文見エス唯喪葬令ニ凡百官身亡者親王及三位以上称薨ト五位以上及皇親称卒ト六位以下達官於庶人称死ト見タルノミニテ天子ニハ崩ト称シ皇后ニハ薨ト称スルコハ見エス然ルニ日本紀垂仁天皇三十二年皇后日葉酢媛命薨トアリ又敏達天皇四年皇后廣姫薨トアリ是皇后ニハ崩トニハズシテ薨ト称スヘキノ古證ヒ皇后ノ位貴シトイヘトモ天子ト同カルベカラス天子ヲ一人ト称シ至尊ト称シ奉ルハ外ニ相比ヘキ位ノ人ナキカ故ニ依ヒ皇后ハ天子ト同ク崩ト称セスシテ薨ト称フ是正礼ニ然レトモ続日本紀廃帝天平宝字四年六月皇后崩トアリ技桑畧記其外諸書ニ皇后ハ崩ト記タルモアリ是正礼ヲ失ヘル称ヘ若シ儲君即位ノ後先皇ノ皇后薨シタマヒナハ尊号宗シレ別勅ヲ以テ崩ト称スルコハアルベキ歟是ハ正礼ノ外ナルヘシ或ハ時

代ニヨリテ皇后ハ権威強平日其後天子ト同等ニ事ヲ行ハル世ハ皇后薨ニ至テモ天子ト差別ナリ崩ト称スルコモアルヘシ是亦正礼ノ外ヘ

一 遺書辞院号ノ予七十歳近クナリヌヤカテ死シ故寺ノ和尚ヘ遺言文ヲ書テ示シタ其文ニ云ク拙者死去ノ表追号ニハ院号居士号等長ヒ称号ハ無用ノ事自性院何ノ字名ヲ付ケラルヘシ殊ニ寺号院号ハ拙政関白将軍家又ハ三条院ヘ速立ラルヘシ信ヒて七条院ノ号ヲ称シ一条ニハ俗名ヲ付ケ速立ラルヘシ速立ラルヘシ速立ラルヘシ此ノ言葉ノ人ホヒ寺院ノ号ヲ称シ公号ノ実ハ我ヲ嫌ヒ強キ武士ノ為ニ院号称シ申ス所ノ名ヲ公伝ヘ本尽ヲ入ル

天治元年 七月十九日

伊勢平蔵真文自書判

寺ハ武蔵国荏原郡之村西久保西岳山大養寺ヘ

神代事蹟ニ神代事蹟カヒカルコトナシ神代文字ナケハアリシトニハ

接説 神代書籍ナシ只古人説傳ノミニテ其説傳モ人々聞傳ヘニ所異同區々ナルヲ應神天皇十五年百済国ヨリ始テ文字渡リ支ヨリ逆ノ後ニ文字ツカヒ成就シタル比ニ至テ神代説傳ヘテ書記シタレ共其説傳ヘ聞傳ヘ同シカラスヌヘ書記スモ同カラヌヘ日本紀ニ書曰トエテ諸書ノ不同ヲ其侭挙ラレタリ何レヲ正説ト決定シカタキガ故千万年ノ昔ノ事ハゲニモサヨウ有ヘキコトナレ然ニ後代巫学家ノ徒神代事ヲ説クニ昨日今日見聞シタルコヲ説カ如ク詳ナルニ過タリカノ神ノ所為アルヘキコトモ思ハレザル奇怪ノ事ヲバ陰陽五行相生相尅ノ理ヲ以テシ或ハ佛説ノ三世因果方便神通神変等ノ説ヲ以テ牽強附會ノ妄説ヲ作リ或ハ神ノ教ヘアリトテ儒家ノ仁義禮智孝悌忠信ノ道ヲ述ヘ交テ餝トシテ妄説ヲ巧ム皆後世ノ巫学者流ノ所為ノ悪ムベキコトヘ神事ハ元来神代書ナク古人ノ口ヽニ語リ傳ヘ聞傳ヘノミナレバ半実半虚ナルヘシ万古事ナレハ詳ナラズ明ナラズ百年廿年以前ノ事スラ虚実異同ノ説區々ヘ猶近リ之今月五六町許隔タル所ニテ往来人ノ劇静詳シケルコトヲ談ルニ諸説異同アリ虚実決シ准シ是ヲ以テ考ヘシモ諸国神ノ本社神霊ハ奇妙不可測ノ霊験著明事アリ是神徳ノ侮ヘカラサル所ノ畏ノ崇ムベキ必渡キ神理有テ然ルナルニ挍ク小キ人ノ智ヲ以テハ其神理ヲ捜リ得ルハ叶サルコトヘ其神理ハ深シ人知浅シ何ソ及フヘケンヤサレハ孔子聖智ナルヲスラ怪力乱神ヲ語ラズトエヘリ然ルニ今来朝性理ノ学ヲ好ム徒ハ理ヲ以テ神ノ侮ル者アリ愚ト謂ツヘシ理学ノ元祖朱熹ノ詞ニ人心之霊ナル莫不有知而天下之物莫不有理惟於理有未窮故其知有不盡ト云リ愚按ニ人心ハ霊妙ニシテ知アリトイヘ共人ノ知ハ浅クシテ限リアリ天理ハ深クシテ限ナシ故ニ其理ヲ未窮アル

一

〻其知ヲハ盡スヒ其理ヲ窮メ盡スコハ叶ザルコト然ルヲ朱
熹ノ意ニハ益〻窮ムヒ以テ求至ル其極トス是叶ザルコヲ
求ル〻無益ノ事〻大学書ノ本文ニ致知格物トカコハアリ窮
理トカコハナシ朱熹格物ヲ以テ窮理ノコトトシタル〻格物ト
人間ノ事情ヲ能辨ヘ通達スルコヨカナリ
カハナリサ　古今集巻第十物名かれなでしこ
うゝゝたのもめふ行ゝうさんうゝふもはるめ
てろと

和名抄巻第十七水草類ニ水苔瓣色立成ニ水苔一名河
苔和名加波奈奈トアリ水草類ニ水苔紫苔苔野蹄列
タレハ水苔ハ食フヘキ物〻延喜式神祇式祝詞部頒火祭
ノ祝詞ニ吾名妹命能所知食上津國ニ心悪子乎生
置ヒ来ル宜ヒ返坐ヒ更生子水ノ神匏川菜畑山姫四
種乎生給ヒ此ノ心悪子乃心荒ヒ水神匏垣山姫四

一

川菜ヲ持ヒ頒奉祉事教ヘ悔給ヒ支トアリ自然ニ海ニ
生スルヲ海苔ト云川ニ生スルヲ水苔ト云川水ハ塩気ナク淡キ故
水苔ト云ハ即川苔ト云コ〻ニ海川ニ生スル苔ヲノリト云〻其ノ
苔食ヘキ物ナレハ野菜ニ准シテ川菜ト云〻。カハナクサ。ヲガ
タ〻イキ。メドニケツリバナ此三ツヲ古今三木ノ秘傳トテ出所ナキ
ヲ造リ云コアリ信用スルニ足ラス三木三鳥ノ傳ノ説妄作〻
ヲガタ〻ノ水　古今集巻第十物名　ものの
みよしのの滝のしらいとはるかにて
日向國高千穂嶽ハ神代古迹〻其山ニヲガタ〻ノ水アリ日向
人其枝ヲ折テ江戸ノ人ニ贈リシヲ繪図ニシタルヲ見シコトアリツバ
キノ葉ノ如クシテ　モチノ木ノ実ノ如ク赤キ実ヲ西タリ其正卿ヲ
求メ見ヘシ
メドニケツリバナ古今集巻第十物名ニ条ノ后春宮乃みや
すんとゝろ時よめどはけづりもちなさせりりとよ

ませのひける　文屋やすひで●花の木にあらさら
めどもさきにけりふりにしこのみなる時もかな　方分
新撰古今集就歌ひえのやまよりけづり花し[illegible]
りけるをよませ給ひける歌の方にをくるとてよみける[illegible]
人ゝまでいかでかへさまし花つけて[illegible]伊勢記氏
[illegible]
或説云めどといふ妻戸之　貞文云今按めどのこと[illegible]
何ぞ書き貞文寿康秀齋ニハケヅリハナニカ、ハラズメドノミヲ
ヨミ入タリメドニケヅリハナヲサセリケレハトハメド云草ノ形ヲケヅリハ
ナニサセタリケルト云フナリメドヲ妻戸トシサセリケルト云ヲサシハサスヿ
トスルハ誤ナリメドハ和名抄ニ云蓍蘇敬本草注ニ云蓍以其莖
為筮者也和名女止トアリ
一　三種神器賀茂貞淵カ著セル延喜式祝詞考ニ云神代
記ノ一書ニ三種寶ト云ヲ疑フ人アルハ貞丈云古書ニ璽剣ノ二種ノミ出シテ玉ヲ云ハズ依テ疑フアリ　顯レタルヿニノミ依テ

モノヲ限ルハ柳古事記ニ伊邪那伎命ノ天照大神ヲ生マシヽヨリ其ノ御頸
珠ノ玉之緒母由良迩取由良迦志而賜ニ天照大御神ニ而詔リタマ
ヘルニ汝命者所知高天原矣トアリ神代記書ニ大汝貴命乃天御
孫命ニ此國ヲ譲奉テ追玉フ時モ即躬披瑞之八坂瓊ニ而長ク
隠者矣トアリ又タ天孫天降タマフ時天照大御神ノ詔ヘリ於
是副ニ賜フ其遠岐斯八尺句玖鏡及草那藝剣ヲ云々ト古
事記ニシルサレタリ是ヲ以カノ一書ニ曲玉鏡剣ヲ三種ノ神宝トハ
有ナレハ何カイツカレトヤ且其句玖ハ天シロシメス主ナルシルシ神璽
ソレニ准シテ國知玉フ大名持ノ命モ是ヲ御頸ニカケタマヒツ・サテ
天孫天降タマフ時ニモ國ノ御主ナル御シルシニ天照大御神是ヲ賜
ハセシヿ上ノイザナキノ命天照大御神ノ天知マス御シルシニ賜ヘル例ノ
然レハ此玖ハ御見箸マス宝ニテ人ノ手觸物ナラズ故ニ古ヨリ鏡
剣ニツヲ以テ大佐時ノ御シルシトハナシ来ルナリケリ又同首書ニ云大名持
命ハ何レヨリ御頸玉ヲ得タマフトモ見エ子ト須佐能男命ノ御

譲ヲ得玉フカラハ国王ニマシマセハ自八尺曲玉ヲ御頸ニカケ玉ヒ
シナルヘシ是ソ御鏡御剣ニサレル大室ナルヲ知ヘシ又云イザナギノ
命ノユヅリタマヘル御サナ玉ハ大御神ノ天知リタマフシルシナレバ其
ハ天孫ニモ賜ハズ天ノ岩門ノ前ニテ招禱セシカノ天照大御神
ノ御頸珠ニナゾラテ作リシヲ按スルニ神代ヨリ以来上古ニハ玉ヲ糸ニ貫キテ
頸ニモ纏ヒ頸ニモカケ手足ニモ著ケテ身飾トセシ是ヲ男女共ニ
貴人ノ装ヒヤサカテ〻ガ玉ト云名ハ神室ノミニ限ラス惣テ良キ
玉ヲホメテ云名ヘ此考別書ニ記ス今畧シ之神室ノヤサカニノ
〻ガ玉ハ神祖ノ御物ナル故コレヲ貴ト崇ルナリヤサカニノ〻ガ玉ト
云フ文字サヘ〻ニ書テアリ皆漢字ノ音訓ヲ借リテアテ字書
タルナレバ其文字ハ自ヲ義理ヲ説ハ誤ヘ神代ハ唯詞カリ有テ
文字ハナカリシヘ

一 宣ノ字訓ノタヘフト訓ム。ノタヘフハノリハ。フルノ中略ヘ
ハル。ノリ音相通ヒ。ミコトノリモ。ミコトハ御言ヘノリハ宣ヘ祝詞ヲノ

抱朴子
姓葛名洪
字稚川
漢朝人師
鄭玄以儒
知名後得
神仙道術
著抱朴子

一

ツト云ハ。ノリトヘイリハ宣ヘ。トハ。タヘフヘノリタヘフトユフヘタヘフヲ略シテ。タ
ヘトユフ。タヘヲ約ハ。テトナルタヘ切。テトプト音相通ヒ。ノリテヲ轉シテ。ノ
リトヘユフ。ノリトヲ言便ニ音テ言。ノリトヘユフ祝詞本詞。ノリトゴトヘ宣給言
トユフナリ。フトノトゴトハ文字ニ字シテ太祝詞事又ハ太諄辞ヒ書ク
太ハ敬ヒ崇ブ詞ヘノトゴトハ。ノリトゴトヘ上ニ云。同ヘ文字カハルコトナカレ
九字抱朴子曰入山宜知之甲祝祝曰臨兵鬪者皆陣列前
行凡常密祝之無所避要道不煩此之謂ヘト見タリ抱朴子
道家書ヘ道家仙術之方ノ行ノ者ヘ九字ハ道家ノ方術ヘ然ルヲ佛家ニ盗ミ取テ前
行二字ヲ改テ在前ト作シテ用ヒ之宋朝施子美カ軍林宝鑑第九軍
務ノ篇ニ九字ヲ載テ大ニ望カ周ニ且ニ授ヘ秘方ヘト云其ノ九字モ前
行二字ヲ在前ト作シタリ大ニ望ノ時仏法ナヘ然ルニ佛家ニテ改タル九字ヲ
以テ周ニ且ニ授ルト云ハ偽ナルコヲ知ヘシ用ルヿ勿ヘ或人ノ云真言宗ノ僧
笈中ニ紙一枚納テ蓋ヲシテ置キ其笈ニ向テ九字ヲ行ヒサテ蓋ヲ開
タレハ。カノ紙四堅五横ニ切レ列ヒタルヲ見タリ不思議奇妙ヘト云

貞丈云其紙サケタルハ九字ノ験ニハ非ス彼僧ハ真言法ニ幻術ヲ交ヘ合セテ行フ者ニ幻術ヲ以テ汝眼ヲ眩惑セシメテ紙ヲ切裂ケタルガ如ク見セシナルヘシ古ヘ空海最澄等カ奇妙不思議法験ヲ云ル昔語リモ幻術ヲ交ヘ行テ佛法ノ助ケトシタルモノニ幻術モ本ト天竺ヨリ出タル術ニ釋迦モ密ニ幻術ヲ備リ用ラレシヲ佛ノ神通トヽナルヘシ奇妙不思議ニ非レハ愚俗ハ歸服セザルニ其幻術狐狸ノ類ヲ使フノ方術ニ人ヲ魅スハ狐狸ノ天性ニ他物ノ及サル所ニ

中臣祓詞

詞ナル故中臣ノ祓ノ詞トヽ云ヘ水名大祓詞ト云物ニ古代禁中ニテ六月ト十二月ノ晦日ニ大祓ヲ行ハル其時ニ中臣ガ唱ル詞ニ此祓詞作者モ時代モ詳ナラズ一説ニ曰ク神ヨリ天児屋命ヨリ天種子ノ命ヘ受テ神代文字ニテ書テ神武天皇即位ノ時奏覧シタマフ天神ノ壽詞トヽ是ヘトヽヘリ是根ナキ事ノ妄説信ズルニ足ラズ諸説皆右ノ説ニ同シ信スヘカラズ賀茂真淵此祓詞ハ近江

神代ノ文字ナキコトハ上ニ記ス

一

大津ノ宮ノ末ヨリ清見ガ原宮比ノ向ニ書ツクヘシト云ヘリ是國史ニ六月十二月晦日ノ祓ノ見ヱシヨリ又詞ノ文ヨリテ考ヘ桂秋齋ノ柿本人麿ノ作ト云然レトモ推量ニテ切ナル證ハナシ詳ナラズ又此祓詞ヲ注解セ書ノ多ク有リ皆巫家ノ著述ニテ儒佛陰陽家説ヲ交ヘ牽強附會シ中古以来神道ト云フ便リニナルベキヤウニ説ヲ造リタル者ニテ取ルニ足ラズイヤゲアル者ヽ加茂真淵ハ古学ニテ後代俗傳ヲ排ケシ延喜神祇式ノ祝詞ヲ尽ク注解セリ其祝詞考中ニ大祓ノ詞ノ注解ニアリ俗傳ニ異ナル奇説アリテ珍重スベキヿ多シ然レトモ餘リ考ヘ過テ穿鑿ニ亘リテ誤レルコモアリ桂秋齋モ古字ト称シ中臣祓氣吹抄ヲ著シ俗傳ヲ排ケセリ然レトモ秋齋ハ偽ヲ好ム癖アリテ其著述ノ諸書妄説交レリ諸書ヲ引テ證トスレトモ其引書疑ハシキ者アリ彼カ著述ノ書ハオホツカナクテ信用シカタシ氣吹抄モ疑シクテ其説取カタシ何レノ註解モ知レガタキ事ニ至テハ皆推量ノ説ヘ書ヲ引ケドモ其推量ヲ実ニセンガ為

舊事紀伊勢ノ五部書等ノ偽書巫学家ノ未書等ヲ引タル
説ナドハ取ルニ足ラズ予中臣祓ノ詞ノ注解ヲ述ントモ思ヒテ諸家
ノ注解ヲ彼是窺ヒ見レニ決シカタキコトアルニヨリテ著述ヲ思ヒ止リ
ヌ明ナラヌ詳ナラヌ事ヲ云ハスハ云フニ及ハサリ故發明ヲ俟ツノミ

一

頼義義家射術清原武則ガ所望ニ依テ義家朝臣坐甲三領ヲ
重子テ樹枝ニ懸テ射玉ヒシニ三領ヲ貫ケリト陸奥話記ニ見タリ大同記ニ
頼義ハ弱弓ヲ好ミ玉ヒシガ發ツ矢物ニ中レハ羽ブクラヲ飲サルコトナカリシ由見タリ
射術ヲ不知人ハ此文ヲ讀テ文花ノ虚説ト思ヒシカ虚説ニハ非ス弱弓ヲ以テ
矢勢ヲ強ク射ルハ物ノ忠身カラ弓矢ニ和合スル故勢強キ是射術ト云者
ノ重タル三領ノ鎧ヲ貫ケルモ同術ナルベシカラニ勝メル強弓ヲ引ケハアノツ
ヨサニ我カラ引奪ヒテ惣身ノカニ弓矢ト和合セサル故却テ矢勢ハ
弱キモノナリ強弓ヲ引ケハ押ケ延ス苅ケハ引ケズ兩牛フルヘ息
ツヽリ胸ヘセキ上ケ腹引込ミ上ツリニナリ腰モ足モ弱ナルクリ保フ
ナラス我ハ發サル二矢ノ方ヨリハナレ行ク是惣身ノカラ弓矢ト和

合セサルヽ如此ニテハ牛前固マラズ矢勢弱ク矢行キ狂テ中リモセズ
今世堂前通矢ヲ專トスル射家ハ弟子ニ初ヨリ強弓ヲ引ハ段々弓ノ分
ヲ上ケテ射サセム弓ノカラニテ堂ノ通サントスルヽ射本道ヲ知ザルヽ通矢
武用ニ立タズ

一

怒物食 俗ニイカモノグヒトテ常人ノ食サル物ヲ食テ人ニ誇ル者アリ武
勇モナラズ無益ノ戯ナルノミナラズ終ニハ毒ニ中リテ生命ヲ失フアルヘシ
昔仙臺ノ政宗ト排ム人アリシガ一日政宗彼人宅ヘ行シニ鼠赤子ヲ
濃キ味噌ニテ煮テ進メタルヲ政宗賞美シテ食ハシカ歸宅シテ大
食傷ニテ將ニ死ニ至ラントセシヲ其家中醫師高屋喜庵ト云者
撥毒圓ト云家方ノ毒消ヲ進メ服セシメテ死ヲ救ヒ命ヲ全セラレシ
其賞ニ喜庵ニ禄千石賜リシ其子孫今ニ仙臺ニ在リ禄モ減ゼス
昔ノ如シト彼國人ノ談リキ匹夫ナドハイカ物食モセヌ程ノ侍ノ主君ニ
仕ル者戦場ニテ主君ノ為ニ捨ベキ命ヲ惜モナキイカ物クヒノ為ニ
死ナンハ不忠ノ至ヽ武士ハ戦場ニテハ主君ノ為メニ命ヲ惜ムヘカ

ラズ常ニハ主君ノ為ニ命ヲ惜ムヘシ事ニ依テ常ニモ主君ノ為ニ命ヲ捨ルコモアルヘシ主君ノ為ナラヌ私事ニ命ヲ捨ハ不思議古キ物語書ニ大食ノコハニタレモイカ物食ノコハナレ是モ近代ノ人ノ始タルコナルヘシ

一 近年国字ノ名高キ人然ハ桂秋齋此秋沙初多田兵部ハ偽ヲ好ミ癖アリ豪傑ナル者ナレモ其偽大瑕ノ可惜哉彼カ著述ノ書疑シキ者多シ中臣祓氣吹抄古物彙函ト云書ヲ引テ武門故実百箇條ニハ古物彙典ト云書ヲ引テリ其記スル所古物非ス妄作ノ已レガ著シテ已レガ引ケル書ニ記スル所古実非ス此外引ケル書ニ記スル所古実非ス已ガ妄説ヲ実ニセンガ為ニ品々ノ書ヲ作リ置テ古書ト偽テ時々取出シテ引用タル者ト見エ秋沙カ書ハ疑シクシテ取カタシ毎書全篇偽ニモ有ルヘシケレモ偽文ル故カホソカナリテ用カタシ

一 偏見活見書ヲ讀ミ文義ヲ解クニ只一方ニノミカタヨリテ外ニ通シ互ニラヌハ偏見ノ此事ニハ當レモ彼事ニハ當ラズ是偏見ノ又義ヲ解クニ博用傍通シテ此事ニモ當リ彼ノ事ニモ當リ悖ル処ナキ是活見ノ

偏見ハ才智拙キト浅学トニ有リ活見ハ才智ノ巧ナルト博学トニ有リ又偏見ハ憤悲スルノナシ活見ハ憤悲ノ勢アリ

一 月下部菅沼眞主同円日下部氏ヲリサカヘト訓スル義如何答曰ノサカヘハ・カサカベナルヘシ月ノ字カトヨム春日ヨカスカ二日三日ヨフツカミカトヨム是ヘサカハナカリノ略ナルヘシカサガリカハノト音相通ナレハカヲ轉シテノノトナシテ。ノサカヘト云ナルヘシ姓氏録ニ其所由詳ナラズ

一 青丹ヲニ 衣色ニ青丹ヲニアリ桃華紫葉無赤内胡曹抄西二條抜東抄等ニ青丹濃青ニ黄ヲサス表裏同トアリ同字本ニカトルハ非ス大塚喜樹問曰青丹トハ名目心得ス黄ニ赤或ハ紅ヲ交ヘタルニテ明ヘナレハ青丹モ青ニ赤カ紅ヲ交ヘタラニハ雅ナレ濃キ青ニ黄ヲサレタル者ヲ青丹ト云フ如何答曰古哥ニ奈良トヲ枕詞ニ青丹ヨシト云ヘリ古奈良ヨリ青丹ヲ出シケルト

之今モ奈良緑青トテアリ　サテ丹ト云ハ鉛ヲ焼テ製シタルヲ丹ト云コ

レヲ和名ニハニト云ニトハスベテ赤キ物ヲ云フ代赭石ハ紫ナル石ナレ是テ物ヲ

染レハ赤クナルユヘニイ石ト云　瓊ハ赤玉ナルユヘ瓊ノ字ヲニト訓セリ

然ルニ青キ土ヲ青丹ト云ハ心得ラレヌヤウナレモ物ノ名ニモ言語ニモ傳用

傍通アリ　タトヘハ藍ハ青キ物ナルニ紅花ノ赤キヲクレナヰト云クレナヰヲウツセハ呉

文字ニクレノアヰ藍ト書キナリ　藍ハ葉ヲ以テ染リサトニ紅花ハ花ヲ以テ染リサトス葉ヲ用イ

花ヲ用ヰ同類ノコナレハ藍ヲ轉用傍通シテ呉藍ト云之　今世モ一類ノ物ノ内ニテカワリタル

物ヲ南京何朝鮮何ト云其物南京朝鮮ノ物ニハアラサレトモカハリタル所アルユヘシカイフヘクレナヰモ呉国ヨリ出ルニアラサレ共藍ト色カハリタルユヘ呉ノ藍ト云ナリ　又黒ハ油煙ヲ子リ

胡麻胡桃ナトモ胡国ノ物ニアラサレモ常ノ麻子ノ実常ノ桃ニカハリタルユヘ胡ト云ヘ

カタメテ色ハクロキ物ヘ然ルニ朱ヲ子リカタメテ色赤ケレモ朱

墨ト云是墨ヲ轉用傍通シタルヘ其如ク丹ハ物ヲ色トル物青

土モ物ヲ色トル物ナル故丹ヲ轉用傍通シテ青丹ト云ヘ丹ハ赤キハ丹

其ヘ物ヲ色トルハ丹ノ用ヘ其用ヲ轉用傍通シテ青キ丹ト云コニテ青

丹ト云タルヘ然ルニ河海抄ニ此處ノ土青クリ赤カリシレト云ヘルハ丹ノ字ニ拘

泥シタル説ニテ誤ヘ惣テ轉用傍通ヲ心得サレハ拘泥渋滞シテ把捉ノ

説出来テ活見ヲ得ルコナシ衣色ノ青丹ハ濃青黄ヲサストム

ヘリシカスレバミドリ色ニテリ即チ緑青(ロクシヤウ)色ニテ是青丹ナリ丹ノ字ニ

拘泥シテ轉用傍通ニ心ツカスシテ濃キ青ニ丹色ヲ交ユレバ紫色ニ

ナルヘ青丹トハ大ニ異ナリ

一　水テ清濁云抗事　あいれちるこれの校　たつた川もみちのすけりあらは

扶桑男名説ニモアリ

あれいろのにのきめたちりもをさろうしうすいうんを渡ぅてうちつつき

うせうりてかりりうみきふてうるゝへ扶桑男説ニ字多天皇施ニ別説ス　たつた川ハ堀光三条右大臣定方卿ト云代ノ後撰集ノ忘ハ寺の息へ

一　草假字(サウカナ)門抗事まよ人のさうしうきみつ抗うるあいとこう出ていふらんすとて

草ト假字(カナ)のうちハたとへ万葉集あるの如く真字ゆて手つろい

真字(マナ)假字ト云いろは文字ニテ書あうそいふ(サウカナ)假字ト云

一カタバミノ文 因幡ニ云ハ[illegible]カタバミハ昔より
用ル文ニ餝折ニモ 東文ニモ面掛賜ニモカタバミノ文付テ見タリ 餝手子
カタバミルヤノモレニテモ
コトモノヨリハヲカレトアリ

一壺装束 俗ニ云ル抱手子ト云フ 用ル所ハ
海松ニ云 俗ニ云フ抱手子ト云フ 因幡ニ云フ
抱手子ハ
ヨモモ〻所
ウルヨリノ
ノ底ニアメタル
日ノイチメ笠
ト云ハ ○真文ニ云 古画ニ女ノ歩ノ姿ニ
笠形ノ笠ニ中ヲ
笠アルヲ見ル
ト云ハ

一帷カタビラト云ハ単ナル物ヲ云ヒ 書ル行方ニ浴
ひらめかれ[illegible]ヒラ 麻ノ単衣ニ限ラズ云ヒ 麻ノ
[illegible]ヒラ 俗ノ[illegible]ヒラ 単衣ノ二字ヲ
用ル 帷ノ字ハ 家ノ戸ニ掛ル[illegible]ヒラ 帷ノ字ヲ
ら[illegible]ヒラ 書ル[illegible]ヒラ 又物ヲ包ム物ヲ
単ノ俗ニ包テ 物ヲ包ム物ヲ包ヒラ
ヒラ 俗ヒラ
ヒラ

一志ニ出哥 芙蓉集正因ニ法補袋ニ云ル出ノ鳴ル時鳴ル哥アリ、
出ハイカナル出ソヤ 養ニ捨ル折モ其哥アリ 司リ志ニ出鳴時歌
シ、出ハコニハナ、キソレラハ、カレツカヤニユキテナキカレ
真文云下句上所タリ 又レハ、カトアルハシ、ラハ、字アヤマリナルヘシ

馬追出

チゴニ似タリ
毛ハ生ス色青シ

一ソハヘルト云詞ハ人サレホコルヲソバヘルト云馬ノ性ヒサハジヲモノバヘルト云此詞遠国ノ俗語ニ成ル清水物語ニ桃尊子ニセテハ云ヒ成ル

[illegible]

一紅袴下女ノ赤著　袴ハ足ヲ覆隠スベキ為ノ礼服ナレハ古ハ下女等モ紅ノ袴キタル　古画ナトニモ多画ケリ　清少納言ハ桃尊子ニゲナモノ成

げすの[illegible]下女の紅の袴きたるいとけ[illegible]

室町殿代ニ至リテハ常ニハキズ　古ハ武家女モ紅袴キタリ分　清少納言ハ桃尊子ニ成ル

録ニ見エシモ應仁大乱ヨリ以後ノコトナルベシ　今ハ将軍家御

基所外ハキタハヌコトニナレリ　大名内室ハ摂家親王家ノ息女ヲ

妻ニセラレタルハ紅袴著用ヒトソ用及ビシ

一唐衣裳　女房ノ[illegible]　[illegible]

[illegible]

いまめかしからんもとて裳のうへにかくひきぬきもちきしたる常は
裳とりひきぬきのうへにおほきと此時は思ひつけたるにても中宮(宮)も
袴はきたる生絹ありけれはひとつぞなくして裳とかれたる
うへにかくひきぬきをとれはさてく是等の礼かはりけるは勝あるを也
古の書ともに今の大內の女房は裳の上にかくひきぬきいれて
用ゐ申し古の礼かたかへり
枕草子秋京寺一切経供養皇后定子行啓の事を書たる段に薄く
ろくろうかりかけしひきぬきの中にてふくらてはや宮たたかふ
ん云々此文にてはひきぬきの中に裳をきこえあつかふときてたる
然れとも文字あやまりて意を害せしこともあり唐衣と裳との間に
裳はかりてぬくくてさることひきぬきの中とそ見えたし

一 袖几帳　袖几帳と云は几帳の代にかざしすることはあらはに見せぬ也

見えし我やかたちを見えしとて袖をかほにおほふを几帳
とするなりこれたそのする也と袖几帳と云へ枕草子頭中将
斉信(タヾノブ)斉信の人々中納言の事あしきにつきてや世をうらむ
よりて斉信の中納言を見すとて袖をかほにおほひ
ゐたりしに源の中納言たゝかひぬるまぎれてかほよ
袖おほひしてやゐたりけるとぞ枕草子には袖きちやう
あらそひやておりゐたるに物ふれけしと書けりされは
袖几帳と云は枕几帳三尺の几帳なと云たくひにはあらず
一 女房の小忌衣　枕草子に宮の女房も小忌きせたりし中略あるは
とりこしらへもきたまへていとしく柄あるる白ききぬに
かた(摺)あをくすりたる(スリタルヘ)と物のかきたるぬのうへにきたる
いまめかしきと云て男女小忌衣は麻布也女のは絹也

用しみえたり小忌衣ハうへきぬの上にきるもの

一ナマメカシト云詞物ヲナマナルト枯レタルトヨリ出タル詞也カレタル物ハ
カハキテ潤ナシナマナルハ潤アリテ美キ也ミヅ〳〵シト云ニ因テ潤
澤アル也

一アサマシキト云詞自他ノ差別アリ他ヲ見テアサマシト云ハ他ヲ浅々
シトソシリタル也物ヲホムルニアサマシト云ハ自ラカヘリミテ自ヲアサ〳〵
シト思フ也枕草子メデタキモノ〳〵殿 殿上の四位五位六位等しつらきたるが下シモ
みもあはせて何とつえ〳〵つりしも殿人よりあれたるにいそ
すぞあさましくめでたきも其物をはじめてあさまし
といふ詞なり

一半臂緒枕草子すさうなる袍の底て子日の精進もしこしもう
司。ちんびのとひのりそやとよもう用ゐたり貞丈按これもちんびの

ろまれ袴と袍の事故也ひとへの裾とハ長きを引とて云るなり
なまれちよる事なり故に是んひの門を切まで記しなる縫て
伊よ見るよ長紀抄也縫ふよもるかり紅桃花蘂葉或抄
云近代衣躰以小袴縫之往古之例以大袴ニ用ヲ縫之今
世が二知人ニあうて袴ハ長き抄なる今ハ絶たり

一ナシト云詞無ニ紛ルオホケナシ。ハシタナシ。カタジケナシ。サガナシ。真加
ナシ。是等ノナシハ無ニハ非ズナシハ只助語也コレハ通音ニ依テオホケナ
シハ大キ也ハシタナシハ端ハタ也カタジケナシハ難氣カタジケ也サガナシハ悪サガ也真
加ナシハ真加也ナシト云フハ。ナルト云ニ因テ意也此等ノナシヲ無ト
シテハ意大ニ違フ也

一イトト云フ又イナトモ云詞ニツモニ最ノ字也モツトモトモ云フ也イチサキ。
イチノチハ最前最後也イトカシコシハ最恐カシコシ也イトヨシハ最善ロナリ

又イトヾトヽモ最ヽイトイチ音相通ヽ

一ウタテドヽ詞ウタテヒ。ウタヽヒヽ博ノ字ヽ小補韻會博ノ字ノ注ヽ
上音襄切無窮ヽトアリ。キハヽリナキヲウタヽヒウタテヒヽタト
ヘバ悪キヿニウタテトヽハキハヽリナリ悪キヲヽヽ嗜衰ノ切音ソヽヽ
ヽ口アトヨムニハ音テヽヽ
ヽ音ニ依テ書カハルナリ
京春敬素性法作
ちるとみてなげくき物を梅の花うゝて白いめ
神よりまもれる 窮ナリ悪トヒルヽ ひさうてとうゝいてもゐハ
又梅うゝとゝ花ゝ博府ちりけうゝ
ものゝもきゝすしてすゝびいめるゝ 又ヽウタテトヽ詞悪
書ヽヽ云ハ窮リナリ悪キトヽヽ ナルニ悪キヿヲウタテト斗ヽハ
非ナリ ウタテワロキトイハザレハ義タカヘリサレヒ悪キヿヲウ
タテトヽ羽ハセリ

一カツトヽ詞且ノ字蔕且ハ字彙ニ苟且トアリカリソメノヿナリ

與又同ヒヒアリ一タヒヨムヽカツトヽ詞ハカリソメノヿニモ。ヽタ
トヽヽヿニモ用ルヽ 人ヒラヽ
つゝ
と云ハまゝ
ても云

一ハタトヽ詞ヽタトヽ同ヒ赤ノ字ノ意ヽ彼モ是モ赤トヽ意ヽ又字ノ
意ニナラズ ヌハモノタツ カサ子テヽナリ 赤モノタツ 京テイヒノ
云ハ昔モ今モ赤同ヒト兩ヲ兼ネル意ナリサレハ將赤トツケテモヽ
ナリ

一チギルトヽ詞人ト約束スル事ヽ契ノ字ヽ俗ニ男女會合ノヿ思フハ
非ヽ古哥ニ男女約束ノヿヲチギルトアルヽヽ俗ニハ男女事ニ限ル
ヤウニ思フヽ

一鳥目千疋万疋賜ヽ古ハ小判小粒ノ金子無ヽサレハ今ノ如ク折紙ニ

金子ヲ糊ニテ付ルコトナシ折紙ニハ真中ニ千疋万疋ナドヽ書タル斗
ニテ鳥目ハ何トモ書ズ当日ハ此折紙ノ贈ル斗ヘ サテ後日ニ右ノ
員数ノ鳥目ヲ運ヒ送ル〻京都将軍時代ニ公私共ニ皆如此
也摘其昔ヨリ如此ナルヘシ遠国ノ大名ヨリ公方ヘ献スルモ先使
者式状ヲ以テ折紙ヲ献シテ後ニ鳥目ヲハ運送ス数月ヲ歴テ
京着スル〻蜷川新右衛門尉親元日々記ニ如此ニ見タリ

一小児ノタスキ 源氏物語藤裏葉巻にたゞひめきみのたすきひきゆひ
給へるむねつきぞうつくしげさそひて見えたまふ 枕草子に
（うつくしき物の段）あまそぎなる児の目に髪のおほへるをかきはやらでうち
かたふきてあかとてみるいとうつくしきものきこゆけよおひするこ
（腰 上）しれたるのあるふたかけたるもこゝろよううつくしう 又（同段）
いミしうこえたる児の二つはかりなるかふたあゐのうすものなと

なゞ二あゐのうすものなどきぬながくてたすきゆひたるが
はひ出たるもいとうつくしとありて 襁褓（ムツキ）をおきせそたまへ
ねとゝこうたれ

一姫マウチキミ 枕草子に見せものゝところに行幸のおり（又見ルモノハ段ニ行幸ノ事ヲ書テツ子ハ何トモナキツカサヒメマウチキミサヘゾヤンゴトナウメヅラシク覚ユ）
（下ノ姫松ノ条参考スベシ）のひめまうちきミ云々 東鑑子の事さはつかまつりし事
根元て見タリ

一稲荷社 延喜式神名帳ニ稲荷神社三座 下ノ社 大山祇 中ノ社
食稲魂 上社 土祖神ト云 皆神代ノ神也 狐ニハアラス

一裳束引キハコエトト云詞 枕草子（正月ノソラハイトウラヽ 其モイトアツクノ段）こゝちよきぬの白きかと
ひきそこえたるおのこでふそう云々 又（ウラヤマシキモノノ段）三十
ばかりなる女のはかまのすそたくしあけてまいるで

たこそえてうぶ云と引たるふ[illegible]。同[illegible]をうへたらん
人ふといめるやなるのけとうゆるるの糸うへのきぬのきこと
きよとゆてめものおひのうるつきるものおもうう
ひきそこえてうう

一 物封文 拙子子吾モ物ノ尼 書きおよりふふんの文えてうう
物封ん〜ぶうてこれうどうもあるもとなる

一 大内裏ノ事ノ様 令式國史等ニ考ルニ天下政事年中ノ事
ナド甚厳重ニ 拙子子常ノ物ノ紫式部日記代々哥
勅撰集ノ事ノ書キ方物語ナドヲ見ルニ大内裏ノ御垣内宮中
ノ仏供ナドヲ常ニ何事モ大ヤウニ德ニシテ大事ハ法式立テ根ナ
ラズ小事ニハ拘ラズセハシノ物外ニメスルコナリ諸人凡情ノヒラ
カニシテタノシレゲニ御前ニモ男女交リ座ニ君臣和悦ノ風ニ好色ナドモ

周ノ世ホセラレサリシヤ公卿殿上人ナト昼夜ニカギラス女房ノ局出
入シ雅談ニ或ハ春花秋月ノ真ニ余レテハ高声ニ詩哥ナドヲ
歌ヒ遊ヒナドスルコアリ或ハ大路ヲ通リ物乞尼法師禁内ヘ
入テ女房ノ局ノ前ニ立テ物乞フコナドモアリシ何事モ狭ク小サカ
ラズ大ヤウニユルヤカナリシ様ニ見ユタリ 古哥ニ
モミシキノ大宮人ハイトヽアレヤ サリシラカザシテケフモリラシノトヨメル
哥ナド其世ノアリサヽ思ヒヤラレタリ 天下ヲ治ルニハ万事大ヤウニアル
ヘキ〻

一 中臣祓ノ詞 祝詞 大祓ノ詞 祝詞ト違タリ 是ハ
サルヘキコヽ大祓詞ハ常ニ用ラレザル故ヘ常ノ祓ノ詞 祝詞ニ拂申シレ
浄メ申ス事ヲ 祓所ノ八百万ノ神達ニ平ケク安ケク聞食セト
申ト唱ルハイカヾ 祓所ノ神達ハ瀬織津姫速秋津姫伊吹ノ主

速佐須良比咩此四神ヨリ外ニハ祓所ノ神ハナキニ祓所ハ八百万神
達ト云ハ誤リ上ノ文ニ右四神祓スルコヲ聞シメシテ贖物ヲ大海原ニ
持出シ可可呑ム伊吹放ヒ佐須良比矢ヒ給ヒタリトアレバコニ至テ
祓戸ノ神ノ聞シ食シタト申スハ前後相應セザル詞ナリ又上文
豊葦原乃水穂乃國乎安國止平ケ久知食止事寄奉哉
トイヒシハ國ヲ安ク平ニ治メヽヘトコヒ然ルニ諸語ニ拂申シ清メ
申スコヲ聞給ヘトコヒ安ラゲク平ケクトコヒハ無用ノ詞ヽ是大祓ノ
詞ヲ直シテ常ノ祓詞ニ用オントテ諸語ヲ作リ替ル時ニ永練ノ
人ノ作替タルナルベシ今是ヲ改ムベキナラハ罪止ム罪祓不有止
祓申シ清申ストコヒテ止ベシ如此罪ヲ祓ヘハ穢モ失セ去テ而後ニ
八百万ノ神ヲ持スベシイヽダ祓詞モ終ラサルニハ百万ノ神タチヲ喚
出スベカラズ最初ニハ百万神達乎神集ニ集賜ヒトアルトハ意
味違ヒタルヽ
一罪ノ字訓ヅミトコヒハ膚ヲ摘ミ痛ムルヨリ起ル詞ナルベシ人ヲ罪スルヽ
ヲツミナフトコヒハ。ナフハ助語ナリ。カコナフ。トモナフ。イサナフナドノ
ナフニ同シ
一鳥目通用金子通用人情金子大判小判小粒ナトハ慶長ノ比
始リシ物ニテ其前ハ鳥目ノミ通用セシ凡物目ニ多ク見シ心ニ
多シト思ヒシニ大キニ九月ニ少シト見シ心ニ少シト思シ心小サクナル今金両
ヲ見ハ少シト思フ昔ノ人ハ今ノ一両ニ當ル程ノ銭ヲ見ハ多シト思フ百両
千両ニ至テ同意ヘ多シト思ハ吝嗇情ナレトモ人情ナレト思ヘハ吝嗇
情生ズ鳥目ノミ通用ノ時代ニハ人情大ナル故財用ノ巡行豊
ニテ世間貪カラズ金子通用ノ今ハ人情小キ故財用ノ巡
行豊ナラズ世間貪シ十両ノ金子ハ神ノ中ニ隠スベシ其十両ニ
當ル銭ハ座席ノ妨ニナル見ル所ノ多ク大ニ異ヽ其見ル所多

文ニ引レテ心ノ動静大小ノ異ナルヲナドト云ヘカラズ心大ナレハ人情財ヲ散ズルヲ好ム心小ケレハ人情財聚ヲ好ム自然ノ勢ナリ此事経済治術ニ関カルヲヘ予此事ヲ説トモ尚微事ナレバ他此意ニ達セズ

一ニ云ク物語藤原定家等云ヒタル物語絵合の巻ニ云ク物の後ノ争ヒトイフ物語ハ伊勢貞丈の説ニ後撰集の巻ノ巻ニ在テ歌の巻ノ巻ニ撰人の作ルヒトヲ記セリ

物語巻の十。蛍の巻ノ巻の中の文ニ云ク

物語巻の十。蛍の巻ノ巻の中の文ニ云ク

真言宗ノ僧侶ノ言ヒシ事ノ

これハ

これハ

これハ

[illegible]

一 [illegible]細助 枕子ゑ[illegible]拍子の座行事よりすゝめ拍子
[illegible]みつものすけ中が將ゐどいとおのしたて
大舎人助べ石寮少丞要拍子大舎人寮行事の時法師

禁色

[illegible]行事ゑ[illegible]風輦の法師とゝ[illegible]

一 高杯大燈 枕子ゑ[illegible]中ゑ[illegible]大ゑ[illegible]
[illegible]

一 如意房袴馬同子ゑ 釈泉寺一切経供養 皇后宮行啓の時 牛車とも二十五ちゃく
[illegible]

[illegible]

[illegible]

ひなのて云く。女も男も共接夫と云ふべし深代
物語ものしる西

一裳上著小袴同手同殿の上ハ裳の上ことちきをぢき
夕べる。殿ハ関白道隆公上ハ関白の宣旨内侍
所ふれ文母へ

一ナキノ花ノ神典　枕草子感ハ慢さまのみうどかく
下風葷葱花葷ノコトハ参考スベシ
或説子ギトハ云
ハ根ノ食ノ故ト
トハ誤リ根ハ
食ベ茎ノ皮ノ
所ノ食ベ子ギ
ハナギ
物語
たハしまし久しくしとめてうれみやきちとに
きの花のみてしるなとしとめてたしさこけ
なる花の事　北村季吟　春曙抄ハ倩ら注せず
○ナキイフ
ユハ異名ヒト
モシトカラ俗ニハ
子ギトカ子ナキノ物語ナルベシ
按ニハ葱花の事なるべし　天子神事の行幸ハ葱
花の冠　よのもとべ冠の座の上ハ葱花と作る
神典も葱と作りなるべし　葱ハひとしと云事の花と
九ことして上となるる形ひとものの外ハきと云け
きハ師説にて食ふ物なり御菜のきとなるのみ
菜葱ナギといふなり

一時奏　枕草子云時礼時抗
庚子ハ子ハ子ハ

迄て守辰丁とて守漏刻と申す者有て毎時に流鼓を
打へ度に入て夫の一刻〻左近衛府官人舎人の一
刻のよし時と奉申へ世の一刻より左近衛府官人
桐壺の巻に左近のつかさのものの名ありしと
ありなくなりとしるも見へ侍る近代頽廢
の比義人さしもなりて時を奉せしと漏刻と
銅壺とあると入て筋と云くに毎日四十八刻とあり
彼銅壺の水をくみて一つのきちとあくいせを見一
刻へ二つ〻くいせい二刻へ三つ〻くいせを一時とす
是を五つ〻に分て四つ〻あくいせを一時とす
のきちの数或は百刻とせ一事もなれど此事よりなどの
比は四十八刻とせすべく侍るといふ事なり

伊勢物語に子のよりせ三つまでとふも是へ源氏物語大和
物語等にも此事なり又九つ〻しハつとハ時の数を
云なり此事式の儀式に諸の時撃鼓子午ハ各
九せ未ハ八寅申ハ七卯酉ハ六辰戌ハ五巳亥ハ四云
一ムダ事　俗語無益のことをムダ事と云ハ本ハムナ事へナトタト
音相通ナリ　ムナシゴトヲ略シテムナ事ト云ヒ。ムナ事轉シテ。
ムダ事ト云へ　古キ詞ニ人乗ラザル車空カラ車ヲムナ車ト云モムナ
シキ車へ俗語ニイハヾムダ車ナリムナハ空ノ字へ俗語ニテハムダ
トヨムベシ　俗語ノ本ヲ知レバ古今雅俗ニ通達スルナリ
一和哥ウタフ　拾遺集に花ちるとなるとをいとしきなれておき
うるよけれどものもうひとしるられぬるもよもし
一事なりひとこと詞源氏物語枕草子の類なり

事なしりなと云るゝ事なしゞと云なり

むかしの人は我名今文字をあらはしあらはしあめや

櫻事なしゞ事なりゝ事なりゝ事なりゝ

或は情の納る所を思男女の
ちぎりもうふもうのひとつ又生産を
たすけようぐるを広大きこしめしてあまたせをもつ妻
と作りしも男女ともに分りて男を内へ入させ
んの出仕を受て是好色をいましめ事なきやう
されども代々物語の欲集の部のるまにまにしれ
ぬこのうしの朝臣のごとの如房のりとの作比物
かくも事拙くなるは是平の世しうの又神楽歌も好色の
歌多し上古朝廷の風俗好色をぜいまつめ遂に世りせ
ありしと見由上代は國の風俗大えうり物事大やりて
捷ふも細事をかくるさりしあるべし後代武家たい
好色を厳しく戒しむ好色よりて歌へ内逸一女のみ

貢物を進献を傾ようる事なし有る者へ情世俗風俗
異なる古好色ハ男女情に止ルノミ後代ノ好色ハソレニ有テ大
ナル禍ヲ引出スナリ

一 絹絶 諸装束物其外古書に絹ニアルハ今世ノ羽ヲ重ノ事ヘ
是ヲ平絹トモ云 経緯ノ糸大細ナリ地平ナル絹ヘ絶ハアニキ
ヌトテ悪キ絹ヘ今世メヾ絹トリミヒ云ヘ経緯ノ糸太細文リ
地平カナラザルヘ是ニ對シテ平絹ノ衣アリ

一 リルトヽ助詞スクリモガリキルモヽ通音ヘ アクル サクル メクル サクル モタクル
サクル アナクル カクル ナクル カナクル ソクル 遂ヨクル スクル
セクル ハクル ヌクル ワクル ククル ユクル 如此クルハ皆助詞ヘ

一 レムトヽ助詞レミモレメモヽ通音 ツレム・カナレム タクレム ウレレム イクレレムナツ
カレム ホレム カレム タレム ナレム キレム セレム ヤレムハ皆助詞ヘ

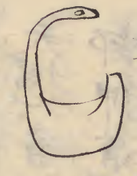
一ムルト云助詞ノル足ル足云 治 清 食 賛 止 噎 淄
集 埋 篭 醒 ト 責
アツメル ウムル コムル サムル シムル セムル 蔑ムル 皆助詞ヘ

一キルト云助詞キリ足キレ足云 握 契 限 沸 紛
ヲルレ口通音ヘ ニキル チキル カキル タキル ヘキル。蔑キル 皆助
詞ヘ

一ナフト云助詞ナヒ足ナトモ云 行 伴 誘 罰 賄
ヒスホノ通音 カコナフ トモナフ イサナフ ツミナフ アカナフ ヘカナフ
ヘシレナフ 如此ナフハ皆助詞ヘ

一鞆繪輪鋒 弦字ヲ神ノ紋トス上古弓射人左腕ニ鞆ト云物著
トモヘ リンホウ ミヨビ ツク
草ヲ以作リ其形圓ニテ腕ニ當ル所ハ平ニシテ腕ニ卷ク草アリテ繪ヲ
付ル是ヲ弦腕ヲ弾ク防ギ器ヘ其中ハ空虚ナ故弦當レハ
鳴音アリ常ニ用ハ鹿ノ皮ニテ作リテ血文ヘ伊勢ノ神宝ニ献セラ
ル、鞆ハ鹿ノ皮ニテ作テ白キ紋ヲ黒ク画ノ延喜式ノ兵庫寮式ニ
見タリ 上古鞆張ト云フ人有テ鞆ヲ作リシガ後代其人絶テナキニ依テ

神宝ノ鞆ヲ水ニテ形ヲ作リ黒ク塗リ銀泥ニテ紋ヲ画ノ今然レ
サテ其紋ニ古今共ニ助ケ鞆ノ形ヲ三ツ寄セテ圓リ画リヘ
鞆ノ形ハ左ノ圖ノ如シ



鞆ノ形如此ヘ此形ヲ似セテ蔑シテ是ヲ三ツヨセテ圓ノ画ハ
ミツトモエノ紋トナルヘ鞆繪ナルユヘトモエト名付ルヘ右ニ云如ノ
神宝ノ鞆延喜ヲ画ノ故俗ニ鞆繪ヲ神ノ紋トス習ハセルナルヘシ然レ
伊勢神宮ニ献セラル、神宝種々アレ共外ノ神宝ニハ鞆繪ヲ画ノ事ナシ
ナレバ武家ノ家ノ紋ト称スルカ如ク鞆繪ヲ神ノ紋トスハ俗説ヘ口輪
鋒ヲモ俗ニ神ノ紋也ト云此紋見タル躰ハ劔ヲ十六柄集ノ柄ヲ
内ニ向ケ鋒キリヲ外ヘ向ケ圓ノ並ヘ輪ノ如ク置タル様ニ見エル
故輪鋒ト名付タレ共詳ニ見ハ劔ニハ非ス佛家ニ用ル所ノ獨鈷
ト云物ヲハッ打ナガヘタル形ヘ獨鈷ノ頭画カキテハ三角ニテ劔ノ鋒ニ

似タリ故ニ誤テ輪鋒ト唤ブベシ出羽國ノ羽黒山伏ノ不動袈裟ニ此紋ヲ金ニテ打テ付ルモ燭鉾ニテ作リタル紋ナルガ故ナルベシ是ヲ神ノ紋トスルハカノ神ト佛トヲ合ヘマセニスル西部ノ神道ニテ用ルナリ

○卍字ヲモ俗ニ神ノ紋ヘトス真俗佛書編ニ按ニ華厳十地品ニ十地菩薩ノ胸臆有卍字又云如来ノ胸ニ大人相アリ其形卍字ノ如シ此ヲ吉祥海雲トタヅクト云云飜譯名義集ニ按ニ卍字本非字犬周長壽二年主上則天皇后壟制此文ヲ著於天樞ニ音之為萬ニトナリ云云是亦佛家ニ用ル字ナレハ神ノ紋ト云モ両部神道ノ俗説ヘ神ヲモ人間ノ如ク心得テ紋ヲ定ルコソヲカシケレ武士ノ家ニ定紋替紋トテ二ツモ三ツモ用ルコアル故神ニモ鞆繪輪鋒卍字ノ三ツヲ神ノ紋ト云フ令式國史其外正トキ古書ニハ曾テ見エズ唯後代ノ俗書ニ

一巴ノ字訓俗ニ巴ノ字ヲトモエト訓ヲ付タリ其故ヲ知リタル人無シ玉篇ニ巴ノ字ノ註ニ布加ノ切國名又巴蛇吞象ヲ三年ニシテ而後ニ吐骨服之無心腹病アリトモエト訓ヘキノ義ナシ諸ノ字皆同シ巴ハ大蛇ノ名ヘ其蛇ノ形ヲカタドリテ篆書ニ◎如此書ヲ楷書ニハ巴如此書ノナリ蜀國ニハ此巴蛇アル故巴蜀ト号シ巴ヲ國ノ名ニ用ルベサレハ巴字ヲトモエト訓ヘキノ義ハ曾テナシ貞文按スル鞆繪ノ形◎如此巴ノ字ノ形相似タルカ故ニ其字形ニ據テトモエト訓ヲ付タルナリ字ノ形ニ據テ訓ヲ付タルハ巴字ヨリ外ニハナシ正訓ニハ非ス俗訓ナリ又水ノ◎如此畑ル形ヲ巴文トスハ鞆繪ノ紋ニ似タルトスハ非ス巴ノ字筆勢ニ似タルヲ云ヘ分テ思ヒ誤ルコト勿レ

一ギボウシ上橋欄杆ノ柱ノ頭ニ九ノシテ上ノ夫ノ物ヲ作リテ置ク
ヲギボウシトモ云キハ葱ヘ葱ハヒトトモシトモ云草ヘ俗ニ子ギボウトモ云ナリ
葱ノ花ノ形九ノシテ上夫ノ物ノ葱ノ花ノ形ナル珠ナリヘ葱
宝珠ト云ナリ 柱頭ノ飾ニ珠ヲ置クニ其珠葱花ノ珠ノ似
タル故ノ名ナリ

一鳳輦葱花輦 天子席ニ乗御ノ輦ハ屋上ニ鳳ヲ作テ置ク
是ヲ鳳輦ト号ス神事ノ時乗御ノ輦ハ屋上ニ葱花ヲ作テ
置リ是ヲ葱花輦ト云 葱花ハヒトモジトモ云草ノ花ノ形ニテ
九ノシテ上夫リタル物ヘ即橋ノ欄杆ノギボウシヱノ形ニ同シ
何故ニ葱花ノ形ヲ用フルヤト理ヲ尋ヌベカラズ只屋上ノ飾リニ
珠形ヲ置タルガ其珠ノ上夫リテ葱花ニ似タル故葱花ト名ケ
タルヘ或人本草綱目葱ノ功能ヲ引テ是故ニ葱花ヲ輦ノ
屋上ニ置ト云説ヲ作リ穿タル義ヘスヘテ理詭ハ此国風
ニアハズ理ヲ以テ云ハヾ葱ハ甚悪臭草ニテ仏家ニテ禁ズル
五葷ノ其一ツナレハ天子乗御ノ輦ニハ用ヘカラサル理ヘ此ノ理
ニハ拘ハルヿナシ唯珠ノ形ノ葱花ニ似タル故ニ名ケタルノミヘ（前ニ記シタル
ナキハナノミコシノ条参考スベシ）

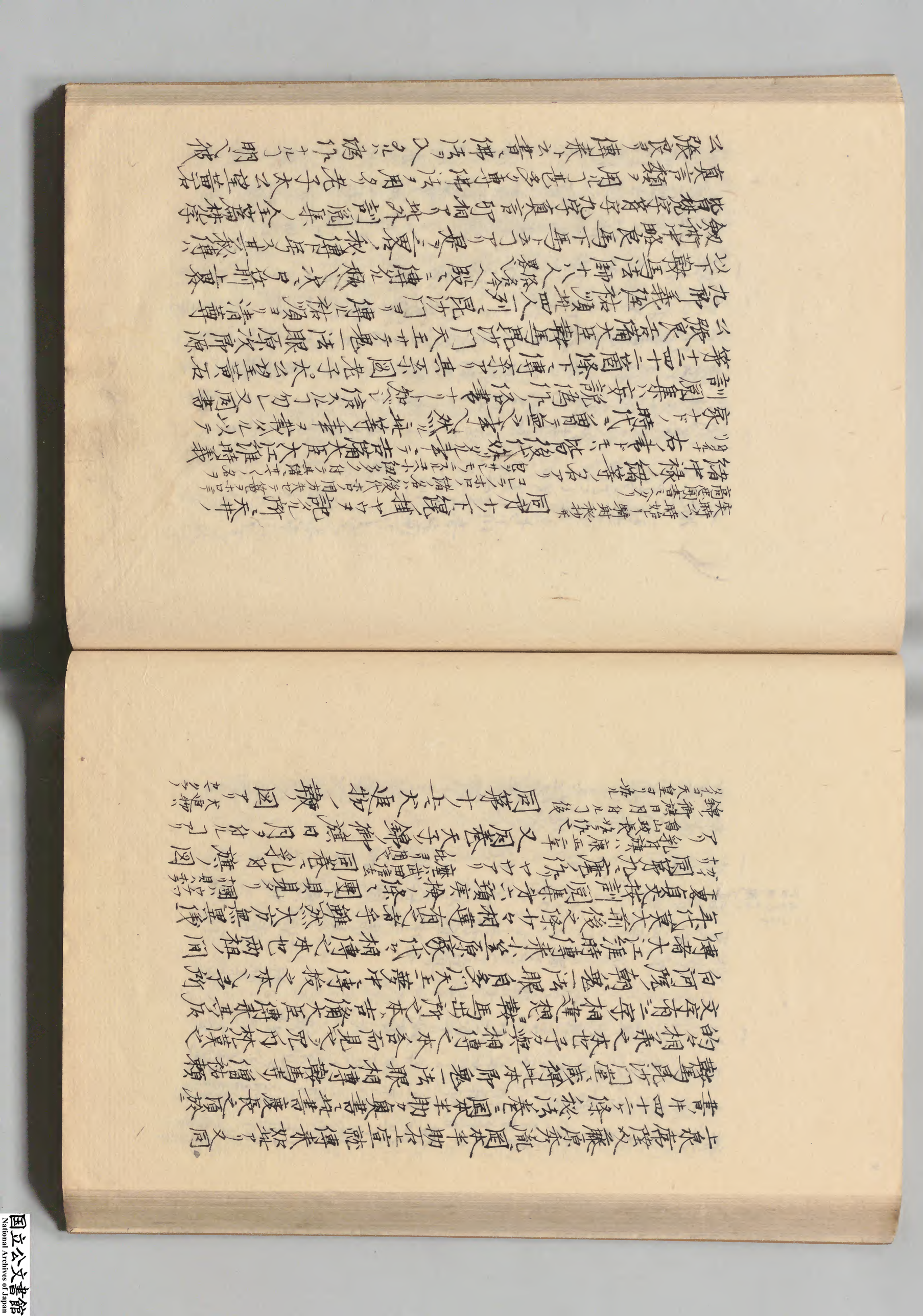
一キミノ祢 文字ニテハ君ノ一字ナレヒ吾国上古ノ詞ハ我カ仕奉ル
主ノ御事ヲ云ヘ伊邪那岐伊邪那美ノ岐ト美ト美是レキミヘキハ男主ヘ美ハ女主ヘカミロキ。
岐神漏美ノ岐ト美是レキミヘキハ男主ヘ美ハ女主ヘカミロキ
カミロミハ一神名非ス惣祢ヘ

一徘徊鏡 紅威鏡布引拙齊問同賢説徘徊紅威一也徘徊ハ

紅花ヲ以テ糸ヲ赤威ハ茜ヲ以テ染ル緋比スレハ黒気アリトニ拙劣
按スルニ然ラナルカ緋威ハ茜染ニテ紅威ハ紅花染ナルヘシ如何答
曰延喜式縫殿式緋ノ袍ノ染式ニ茜ヲ以染ノ茜外ニ交ル染種
ノ分量染緋法緋ニ依テ違アリ然レトモ一條院御代ハ比ヨリ
延喜式染式ハアレトモ染匠ノ拙アリシ故又倹約簡使ニ
依テ故古式ヲ不用ルニテ深紫深緋深紫深緋色深ニテ黒ノナル
共ニ五倍子鉄漿ニテ黒ク染ニシテ差別ナクナリ来リ浅緋メヅラノ緋ノ染
疑モ左准スレハ染式古ニ違ヘルナラム後代ハ浅緋ノ袍ヲ萩
芳ニテ染ル疑古染式ノ廃レ来レルヲ知ヘシ又延喜式ノ染式ハ
袍ノ料ノ後一疋ヲ染ル分量ヘ外物ヲ染ル疑ニ非ス支緋ト云ハ
染色ノ名ヘ茜モ紅花モ染草ノ名ヘ茜ニテモ紅花ニテモ萩芳ニ
テモ緋色ニナルニナレハ緋ト云ヘシ然レトモ中古以来茜ニテ染レハ
少黒ミテ緋ニテラズ紅花染ハ緋ニナルユヘ緋威紅威共ニ一物ニテ
赤威ハ茜染ト云ハ此故ヘ

一帯盤國ハトコヨノ國トヨム俗ニトキハノ國ト云四季ノワカチナク常ヘ
ムサシアワミニシルス
トコヨノ國ノ國氣ノ國ト云フヘ仙境ナドヽ云ガ如シ天竺國ハ大熱國ニテ常ヘ
夏ノ如シ四季カハリメナシト云方國ノ中ニハ常春ノ如ノ常ヘ秋ノ
如ク帯ヘ冬ノ如ノナル國モアルヘシ古昔ハ
モミヂヒストキハノ山ヘスム鹿ハサノレナキテヤ秋ヲシルラン　朗詠集態

一剖尼集軍配傳書ヘ十七卷アリ此書ハ大江ノ維時ヨリ小笠
原家ノ傳来ト云毎卷ノ終ヘ連名アリ其連名ヘ云清和天皇後胤
自源義家ニ當家代々相傳従二位源朝臣頼氏（清書ニ正京大夫熱田ノ大神ノ通）
従二位源朝臣氏隆ヘ（肩書ニ正京宮大輔泉伊予守）従四位下藤原信濃朝臣（肩書ニ泉武蔵守）



四人ノ時代漢土ニイマダ佛法渡リ来ラザリシニ然ルニ佛法ヲ
入タル拙キ偽ノ三界ノ書ハ七書ノ中ニ在テ割注集ニ載
タル如リナル山伏ノスル業ノ類ニハアラズ信ズル勿レ

一姫松　公事根源安和伝の篇にあるいまだ詳ならず云ハ内侍
月の被物よりの抄よりて行幸の時姫松とて松しきるよ条
て侍るなれ書しるし此文とるるも姫松とるよ
此名ハ移り変りし此振舞を知る人ふし身文接ならつま
ハのる行幸の時ハ如何ものきこと方清女
納涼殿子と行幸の書と云ふる一本よ云先まる七ものる代
いろ〻ハ文前に記る加今ハ略之ものきこと略
して中ものきこと云ふ今ナトノ時ハ（チャンタ）云あ中ものきこと
下略して云あまもト云ものきこと

字ハ訓ヲ付して書るこ移樹よ抱るよりの生又引先
移ふ云るものるもの中ものきこと訓也

一職人哥合後九品。建保職人哥合。三条良基の職人哥合。年露
寺親長卿職人哥合。勸進聖職人哥合。藤家職人哥合。
一条禅閤職人哥合。烏丸光廣卿職人哥合。後水尾院職人
哥合。無名職人哥合。以上九品

一蛇苦本　鰹破前　菅沼貞主閑田明衡ノ新撰楽記ニ
野千坂ノ伊賀ノ専之祭ノ門蛇苦本舞稲荷山阿小町之愛法鼠
鰹破前喜ノ云ト此蛇苦本鰹破前トハ何物ヤ考ニ和名抄至
金類ニ房内注云玉篇ニ揚武漢語抄云鼎注云破前ニ云
麻前良云　身文接或麻前良ノ　中略ヒラ麻良ト云　然レハ破前ハ男陰ハ鰹鮫ハ古鰹

トハカリ云カツヲハカタウヲノ略語ニ乾テ堅シ奥ト云フ男陰ノ起陰シテ堅キヲ譬ヘテ鰹破前ト云フ下ノ句鰹破前ニ對シテ蛇苦林ト云タルハ蛇苦林ハ女陰ニ女陰ハ扁ノシテ蛇肉ノ如ク薄キ處アリ又蛇苦林ト云タルニ是戯言ニ

一蟠蜋北足一條兼良云ノ天素往来ニ蟠蜋北足進之候トアリ是馬ヲ皁下レテカヘキリノ如ノヤセタル馬ト云フニ然ノ書ニモ痩馬事ヲ蟠蜋ト書タタリ 俗ニ痩タル人ヲ見テタウロギノ如ヤセタルト云ハ蟠蜋ノ云ヒ誤ニカウロギト云出モアルユヘ紛レテ云誤レルニヤセ馬ヲ蟠蜋ト云フ故事アルガ追テタツ考シ

一青色青彩字アヲレト訓ハ藍染ノ色ニ藍色黄色ノ交タルヲ緑ノ云是ハ正青アラス然ルニ草木ノ葉色ヲ青ト云ハ緑色ハ

兼帯シタル黄色ニ掬ラズレテ本色ニ依テ至リ

一蒼色 蒼字アヲレトヨム青ト同シ又白キニ少黒色ノ交リテ灰色ナルヲ蒼ト云フ白キ少黒色ノ交リタル色ハ薄青ニ似テ紛ルヽ故蒼トモ云ナリ 正蒼ニハアラス本名ハ灰色ニ

一寺院号 寺院共ニ本ハ宿舎 ニ号ニ異朝ノ鴻臚寺光祿寺大理寺等アリ皆庭舎ニ昔朝ニハ省院禁門院等アリ皆庭舎ニ又淳稚院等学院等ニ学文所ノ名ニ異朝後漢明帝ノ時永平十年始テ佛像佛經ヲ白馬負セテハ渡来ル白馬寺ヲ建テ像經幷僧ヲ置ケリ是亦宿舎ニ準レテ寺ト号シタル歟又ヨリ以後寺ト云ハ佛ヲ置キ僧ノ住處ノ名ト成リ其寺中ノ役所ヲ何年院ト号スル故是モ佛ニ付タル号ト成シ歟又佛寺ノ中僧居所ヲ寮ト云是モ本ハ宿舎ノ名ナリ

吉朝ニ内蔵寮大炊寮大学寮兵庫寮其外多ク皆庭倉
ノ名ヘ佛寺中ノ役所ヲ何寮トカフヨリシテ是モ佛ニヨタル
名成リ又云死人ヲ追号ヲ何寺何院トカハ其人存生ノ
時後世ノ為ニ佛寺佛院ヲ建立シタル故其寺院ノ号ヲ称
スベキ是摂政関白将軍家等高貴ノ人ハ寺院ヲ建立シ
給フ故此号アリ存生時寺ヲ建立セラレズトモ死後ニ位牌ヲ置
處ヲ建立シテソレヲ何院ト号スルモアリ皆高貴ノ人ノ上ヘノミ凡
下ノ人ノ院号ヲ称スルコハ曾テナキコトニ今世ハ武家ハ禄ノ者モ
皆院号ヲ称スカタハライタキコトニソレサヘアルニ金子ヲ出セハ商人
浪人ノ類ニテモ寺僧カ院号ヲ賣リ物ニスルナリ又云物ヲ知ラヌ儒
者ハ　将軍家ノ御追号ヲ文ニ書クニ　大猷院ヲ大猷君或ハ
猷廟ト書キ　常憲院ヲ常憲君或ハ憲廟ト書類アリ

御追号ハ勅号ニ何ソ私ニ院ノ字ヲ削去ルヤ上ヲ蔑如スル罪軽カラ
ス其文異国風ニ似テ宜キカ如ナレトモ此国ノ礼ヲ背ケリ礼ヲ知ラ
サルハ儒ノ道ニ非ス儒者ハ唯大辞ヲ異国風ニ作ルコトノミ
ヲ好テ此国ノ風ニ違ヒ礼ヲ背リコヨハ心ツカス愚ベト謂ヘシ吉國
ヲ賤メテ他国ヲ貴ヒヨトハ何聖人ノ古ヒ教ナルヤ近世ノ儒
者ハ聖人ノ道ヲハ守ラス唯文辞ヲ賣リ物ニスル故道ニ背キタル
徒多シ

一ウタヅガハシキトハ詞ウタガハシキトハ詞ニツノ字ヲ添タルナリ無異ナリ

一万葉集ハ孝元天皇ノ時代ニ成ル皆男女ノ歌ノ集ニ天平
勝宝ノ年ニハ九大伴橘諸兄ノ注ヲ加ヘ大友ホヲノアソンノ家
集ヲ加ヘ成セリ

一正科或同書簡牘文ノ者ノ用ヒタルモノ多シ　又リのめとも云
音ハ通ヘリ

と云ふ説は如何の書にあるべし斜の字と斜は拘のもじ叫びなる
を云ふとしるしあるは正しからざる形をあやまりたるなり
正しきしるしあるべし拘ふなりとふは正しく拘ふなり
云事也

一考任令　日本紀持統天皇紀四年依考任令と云文あり是
大宝令より以前に令書行はれし古今なり

一權北方栄花物語に北方と云ものいらせおはしませる事
ものこと方にさせたまひたる大捕とふ人をつらひつけきせたまひて
いらせ給ふ所ときめきつかせ給ふれば權の小の方
あてめてさしきこのもれとは朱三條右大臣兼通公也
うとは内侍とは小の方のすべ權の小の方とは外戚事なり
さる加様にあるべきなりてなられて權の小方書事也
ろし

一誠道歌心に成道よりもまことに神やちはん
は歌の書も尽せる世界のうちに天照大神
の歌とも又は歌の天地文字の口訣とも云説あり此等
の九神は神代の歌のもとなるべし又滅の道と云詞
は儒者の詞なれは天地の出歌とふべしすべて天地
文字の出歌と云ふ事なん歌我道も神やちはん乃
ゆの字は後人先えさぐ〳〵なるべし上ゆのいひけれ
ばうたは神とちはんといふ事なり　故神と云て
変奇日姓よりつゝまつる所代をいふは神でちはん
東将藤原有房
拾遺抄
奇日山うゆの山の月もかたぶく花ぞ神はせはん　花宴

神やとゝてハうゝゞして変せざる詞りれい上の句誠の乃よ
うゝしちのをもいしゝ詞よお意をもて神でちらん神ハ
ちらんと行ひを上の誠の乃ようゝしなむとゝまきび
しゝ立をゝる心有の神でちらん神もちらんのらん
ハ疑の初よりうゝを決定のちゝてふをちゝ芹法定
していまされば上の誠の道よりうゝしちむとゝるゆし
なしゝ多ゝのるハ古歌の初つゝしと神ハ行ゝ
ぬ人ハ罪しをきゝうゝゆゝし有の誠の道よりうゝし
ちゝの表を反文云

心すゝ誠の道よたゝしうゝをいのれをとすも神ハちらむ

一無量壽佛　阿弥陀トゝハ梵語ニテ唐土ニ翻譯スレハ無量

壽佛トゝトリ量無り壽命長リイフニテモ死サル佛トゝヨリ極
楽國ハ別世界世トゝヘドモ是亦天地間ニアラザルニハ有マシ
天地ノ間ニ生活スル物何ソ死ザル物ノアルベキヤ阿弥陀入ヲ
無量壽トゝヘバ外ノ佛ハ短命ニテ死スル佛モアリト知ベシ
佛ハ死タルハ何レノ國ニ生ルヤ阿弥陀（外ニ二十五菩薩モ長生ナルクイツモ
東弥陀来迎ニ供ヲセラルハ由サラバ阿弥陀一人無量壽ニテハ
アルベカラズ外ノ佛共段々死タラバ極楽國ニ佛ナクナルベシ
妻モナケレハ子息モアルベシ佛ノ家断絶スベシ焔魔王代
替リモアル欤是モ死ナヌ性ノ人欤内室モアル欤子息ノ名ハ
何トゝヤ是等ノ事明僧ニ尋問テ知ヌテモノナリ

一古律古今　日本紀天智天皇十年ノ紀春正月己亥朔甲辰

東宮太皇弟奉宣（或本云大炊皇子宣ヘ）施行冠位之法度之事ヲ大ヘ
敕天下ニ（書紀）法度冠位之名具ニ載於新律令ニ云々按新
律令ト云ヲ見レハ此以前舊律令アリシヲ知ヘシ。同持
統天皇紀四年記ニ云依ニ考任令ニト云文アリ　同天武天皇
十年紀二月庚子朔甲子天皇皇后共ニ居ニ大極殿ニ以
喚親王諸王及諸臣ヲ詔ヲ曰朕今更欲定律令ヲ改法式ヲ
故俱修ヲ是事ヲ然頻就是務ニ云事ヲ有閑分ヲ應行
。此後文武天皇大宝元年更ニ律令ヲ撰ハル其後又元
明天皇養老三年律令ヲ改撰セラレ續日本紀ニ見タリ

一巫字訓カンナギトヨムコトハカミ子ギトヨムカンハカミヘ神ノ
字ヘミトハ音相通。ニヘカミヲカンヒヒナギハ子ギヘ子トナト

音相通ニヘ子ギヲナキトヒヒ子ギトハ子ガヒノ約語ナリ
カヒ如キヘ巫ハ神ヘ子ガヒイノコ申ス者ナリニヘ神ニ子ノ（子ハ子ギトリ子ガフコナリ子ト）
トヨコカミ子ギトヨヒ通ヒ音ニヨリテ。カンナギトヨヘ称宜ト
ヨモカミ子ギノ上畏ニテ即カンナキヘ其詞ヲ称宜ノ二字
ヲアテ字ニ用タルヘ子ガヒトヨヒ子キモノトヨヒ子ノトヨ證ハ古今集ノ詞書ハ
ぎことさのミきしけん社こそてハるげきの表となり
らめ　源氏

一俗語用字俗語ニアテ字ヲ用ルヲ世語字トヨ世語字外ニ本
字アリ。俗ニトクトヨヒ熟ノ字ヘトツリトヨヒ俗用ニハ得ト書ク
。俗ニフトヨヒ不度ノ二字アリ俗用ハ風ト書ク。俗ニタミカニトヨヒ
切字ヘ俗用ニ焦ノ字ヲ書ク。俗ニシカトヨヒ緊ノ字或ハ
密ノ字ヘ俗用ニ脆ト書ク。俗ニナトヨヒ（チヨト又チヨトヨヒ）ハ竹ノ字ヘ俗用ニハ

鳥渡書ク。俗字ニチラト云ハ（チラリト云モ口）閃ノ字ヘ俗用ニハ散与ト書ク。俗ニヒヨトト云ハ（ヒヨツト、フト云モ口）不度ノ字ヘフトノ轉語ヒヨト、ナルヘ俗用ニハ飄与ト書ク。俗ニズントト云ハ（スツト云モ口）最ノ字ヘ俗用ニハ才与ト書ク。俗ニマシテト云ハ況ノ字或ハ矧ノ字ヘ俗用ハ増而ト書ク俗ニドナリト云ハ何方ノ字ヘ俗用ニハ殿誰ト書尚此類多シ帝ノ俗用ノ狀ノ文言ニハ俗用ノ字ヲ用ヘシ水字ヲ用テハ俗ニ通シ難シ俗ニハ水字用ヘカラズ

一そて俗名の物語ハ堯孝の書ハ一周忌ヲ云ふ又毋子ハ一周忌ヲ云ふ栄花物語ハ

殷の終ヲ云ふ又毋子ハ一周忌ヲ云ふ栄花物語ハ

きぬぎぬの帰の巻ハ系融院崩御の書ヲ書て次の

元そてあ弟の者ヲ書て月日もすぎとていれて

元慶三年よりしめあいまるとうあき世よりん二月

ふる故院の出てあくれハ天下いそきうつ成ぬ世の中のうすふびうそ

ものうそうなるうつ成ぬ世の中のたなとうつ成ぬ

の法華ハ一周忌の

一きりくもの コホロギ 揖取魚彦カ古言梯ニ万葉蟋蟀ヲ鳴ヲあ

成ハ告古保呂義ヲ云ふ我名抜ヲ蟋蟀ヲ

きりくすヲ云ふ語ヲ云ふ 按ニ和名抄ニ蜻蛚古保呂木

蟋蟀木里木里須ヲあらり紙ヲ引ちりくも月ちりき

抄ニ古代名ヲあやまりうつ成今俗ニそハつりさせヲ

うりうぎヲ云ひうぎの如くきりくもヲ指くときりくり

もヲ云ハ名ヲうりうちりうりくもヲ指くときりくり

古今集 詞書ニ 秋風ハ ほろびめしし名ヲ成ぬ成ぬ成ぬ成ぬ成ぬ成ぬ成ぬ

ちく　棄棟柔

和名抄以下浮世万ふいあるもし　和名抄ニ蜻蛉ト蜻蜻ヲ二種ニ分チハ誤レリ物ノ玉篇ニ蜻蛉ハ蜻蜻ノドトリニホドト云字ナラス

一スヾムシ。ヤツムシ是モ今江戸ニテハ各ヲ取チガヘテリン〳〵トナクヲ改ム虫ト云ヒチニ古リシ上ナリヲ松虫ト云ハ誤レリ猿楽の謡物野宮ト云ある其歌文ノ雅ノ多ハリ〳〵トシラトヽヘリカノ謡物ハ古物ノ心詞トスベシ

一ヒカヘルト云　俗語　剣術ヨリ出タル詞ニ立テカヲ提ケ両手ニ拇ヲ持ハカヲスヾカヒニナレテ向フヲ鋒ニ構ヘルトヽ　カヤウノ何ノワケモシラスシテ人ナミニイフヲホシレ

一栄花物語巻子十六殿　栄花物語巻子十六根あるもの巻の末の方ハ後令象院天長五年正月皇后宮弁今の書ヲ勇ヲ世の所ハ中きうり人の所ハ人をなし

物ヲ人の中ハ幸ある物とたゞ物ハ人なりもの書
ことゝ云ある人なりもの書ハ中ハ人なりもの書
物のるい中くるるれ幸月のひもたるてを殿の大納
云大臣よりふ殿よりれ弁今ハ中将て
れ殿ハ中ハ人のせもいふもいふ状
物ヲ人のとたもまもくもおりやくき書なれと
ふのるれもやまはもれう幸ものる
もをけりくくもうくたりれもるるる
りるい人もをもるもしへもなる。ハ文殿文ハ狐り
物貴全幸角の殿ハいりもを唯弁今のるれりる河の
殿めきもを中ハ心或人ハ文をもて殿ハもと只て北
三十二年毛ハくい立保ハつ作て代毛を殿る五殿

あらとしのやまとのくにのかみ　并四十巻まで後京
の業の撰ばれる　本朝書籍目録に世継四十巻月序多
天皇至堀河院御宇に載長臣卿の業撰々
とかけり　但かの目録に書いたる門院御序の人後世にて
法名覚寂と号す　世継物語　法名覚寂
一名栄花物語　云古物語　別名世継物語　はなはだの
書籍目録に世継四十巻とかけり　並へ栄花物語四十巻赤染衛門
作とかけり　後人の加筆　花の田在満校本に栄花物語とあり
傍よりイニナレトと注シタリ　古本とハ世き事とあるなり　赤染
迄世よりも百年もとりも後の事なり　名業撰なるべ
疑へしも

一　師字訓　日本記應神天皇十五年ノ注ニ阿直岐亦能
讀経典ヲ即天子菟道ノ稚郎子師焉云云　此師ノ字フミ
ヨミヒトヲ又ミフミヨミト訓ヲ付タルハ當ラヌ訓ジフミヨミ
ヒトハ讀書人也是御ノ字ヲ添テミフミヨミトヨミ是ニテハスベテ
書ヲヨム人ベ太子ニ讀書ヲ教ヘ捧タレバ師ノ字ヲシヘビトヨム
ベシ

一　春日祭太刀　春日祭ニ野太刀　十振　柄ヒミ巻ツバアリ　朝黒ナリ　中太刀
十振　長二尺　小太刀　世振　是等皆持出ル　唯祭道ナリ

一　栄花物語　名世継物語　本朝書籍目録に世継四十巻
藤原為業撰とあり　世継ハ栄花のるいとかぶべし
一説ニ栄花ハ赤染ヲ作ルとなり　赤染ハ永延ヨリ作ル　百年
ヨリ後のるものあるべし　赤染ハ作ルもとかくし　又栄花
物語ハ五巻　内大臣後おもせ物語

長徳二年伊周公左遷ノ時ノコトヲ文ナリ

代あり。どもうちはらてうみてまつ世ハ法華
ハさいま丗三ぢうり世ぢうちとれりうち
きうけ世ぢ文のいまとめてし四のひる保氏も
かくやありんと見へくまつるに光源氏の物語ハ一條
院の由時紫式部ハ彼方の内大臣殿と云ふ伊周公の
事ニ一條院の中代の人ニ伊周公のるとり名ニ
ふとて氏紫式部ハ書りる物語のひる保氏も
ひ生ちそ中記ニ赤染ハ一條院中代の人ニて
紫式部と同時の人ニ同時の紫式部ハ作ル物語を
引ニ氏ハ見る保氏とハ申ましてハ見て赤染
ハ作ハ書ニ書と彼ハ又按ニ書の表端の文ニ
世継と名ぢくべき文あり是ハ世継物語と云ハ

世ぢう終まて栄花のことを書ニ書ニ続ていまく
ニ世ぢうハ栄花物語と云ふ名ハ
世ぢうもあ氏本朝書籍目録ニ世継四十卷
後撰集ハ作ル次ニ市枝ノ本ニハ栄花物語四十
卷赤染門作ル歟書ニ是後人の加事ハ
古本ニハ栄花の君ナシ世継と栄花と別物ニ
加へ氏ハ古書ニ引ニハ皆世継トアリ事世継と
引ハ皆栄花ノ文ナリ又ハ世継ノ翁ノ物語ハ
續世継ノ書ニ
一霊屋 常花物語卷七多ハ物の卷ニ多ハ世の南の方ニ
二十ちうさりてたまやしふ物をつくりてついゐぢちで

先きゝ[illegible]て世[illegible]ハ是ハ
長保二年十二月十日一條院皇后宮産後ニ
薨し給ヒし時ハ妻せ一書ニ云
[illegible]
[illegible]
[illegible]

祈禳スル作法ヲ云是中臣齋部両氏ノ家ニ傳ル所也ト部ハ
神事ニ大占トハ鹿ノ肩骨ヲ拔テハカノ枝（ハカハ櫻桃ノ枝イスラウメモハウイトスフモノヽ）
ヲ然シテ焼テ占フ法アリ後ニ大占ノ法絶テ亀トヲ用ラル亀トハ
亀ヲ焼テ占フベシ右ノ事共ヲ神道トヤヽ神ニツカツツル道
ムコヽシ然ル後代ト部兼倶（ヒヨリカネ）正直ノ二字ヲ宗旨ニシテ人ノ教ノ
道ヲ造リ出シテ天照太神ノ人ヲ教ヘ給フ道ヽシト称シテ
彼祭祀祈禳ノ作法ニ合セテ是ヲ神道ト称シ秘事一口
傳ヲ造テ是日本ノ道也トイカメレクシテ儒道佛道彼
神道ヲ並ヘテ鼎ノ三足ニ譬ヘツヽ閑ヘカラサル道ヽシトス
上古曾テ此説ナキヽヽカノ神ノ人ヲ教エタマフ道ノ事
古事記日本紀古語拾遺等ニ曾テ載セス後代ノ未書
記タルハ證ニ立ス実ニ其教ノ道アリシナラバ本朝ニ文

字渡リシ後何レノ天皇ニテモ教宜アリテ神代ニ人ヲ教タ
マヒシ道ノ本旨ヲ博士ニ命シ記サレメテ後代ニ傳ヘ示
サルヘキ事ナルニ其本旨モナケレバ神ノ人ニ教エヒシ
道アリトスハ妄説偽作シ神道者ハ日本紀神代巻
ヲ其本旨ノ如クスヽテ説ヲ設ケテ教訓ノ如ク説キ
ナセル日本紀ハ國史ニテ神ノ事蹟ヲ載タル書ニテ教
訓ノ為ニ書シ物ニ非ザレハ其本旨ノ如クスヽハ無理ヽカノ正
直ノ二字ヲ宗旨ニスルハ何ノ據ゾト考ルニ北野天満宮ノ
御哥ヨミ心タニ誠ノ道ニ叶ヒナハ祈ラストテモ神ゾ守ラ
ントヨトヽ又沙石集ニ見タル聖徳太子ノ御詞ニ謀計ハ雖
為眼前之利潤終當佛神之罰一正直ハ雖非一旦之依

怙必蒙日月之衰ヲ後是ヲ天照大神ノ詐宣コレヲヘタリ トアルナドヲ取合テ正直ノ
二字ヲ以テ宗旨トシタルナリ 浅ハカナル造リ事ヲ正直ヲ
宗旨トシテ教ルモ悪キコトハ非シた神ノ教ヘト偽リガ悪
シ凡人倫ノ道ノ事ハ神道者ガ教ニ及バス 其為ニ儒道アリ
片端ヲ似セ物ヨリハ其本道カ善シ

一 后ノ后不仕童女ノ栄花物語ハ六巻ノ内ノ后ハ
日ハつるも七巻ハ宮ノ内ノ今の世ハ此ノ六巻ノ
つるも七巻 寛弘五年

一 産湯棚月書巻中宮彰子ノ産湯ノ棚ハ産ノ事ノ底ニ
ヤのさ
ヤ氏のたさもれ月きてうすのみてうよ寄るみつ
ふ
ふ
ふ

後水尾院宸筆出雲の書　十六日出雲ノ夢ヲ見ル夢ノ書ハ敬
勅学院の所にあるとて手ずからきざんの文をばそ
又十六日内の御ふみ文の事も同文あるをさん
の文とは　見参の文なり　勅学院の所あまつさへ行る文を
ゆるされ　見参ハ　ゆるされまいらせ　人々ゆる　所今日ゆるされて　多人の名のこゝる也
見参の文とは　ふべ　出雲　ゆるを見参の人とゆるして
当日出雲ハ　多人のゆる也

一日本紀御讀不讀釋日本紀秘訓篇　葬死　薨　諒闇山陵
疾疫等　凶事又屎尿等　穢汚事等　日本紀載ル文字
ヲ主上ノ御前ニテハ讀サルヲ　故実トス　是ヲ　御讀不可讀ハ
記シタリ　是上ニ忌ニ嫌ヒ給フニ依テ下ニモ是ヲ憚テ讀ザルナル
ヘシ然シ乍文字ヲ省キ去リ句ヲ脱落シテ讀タラバ文義ハ
貫通スマシギヘ然レハ日本紀ヲヨヽシノテ聞シメス乍無
益ノ事ヘ文義貫通セズ乍日本紀ヨヽセテ聞シメス
トヽ名聞ダニ立テハ宜シトナルベシ末世ノ風ナリ

一ト部氏　神代ニ太占ヲ司トリシ家ナル故ト部ト云太占ハ鹿
ノ肩骨ヲ抜テ櫻桃枝ヲ焼テ占ヲ法ナリ或人ト曰ト部ハ
亀トトテ亀ヲ焼テ占フコヲ司トルト部ノトノ字ハ亀ト
ノトノ字ヘトヽ此説非ヘ神代ニハ太占アリ亀トハナシ古事
記日本紀ニ太占アリ亀トハ欽明天皇ノ御時以来アリ日本
紀ヲ見テ知ヘシ後ニ太占法絶シユヘ亀トヲト部ニ司トラシム
神代ハ文字ナシ唯詞ニテウラベトヽシノヽヽ後ニ其詞ヲ

文字写ス時ニ戸モウラトモウラナルユヘト部ト書キシヘ占部ト書ヘシト部ノト字ニ付キ泥ニテ神代ニ亀トヲ司トリシトカハ誤リ神代ヨリ應神天皇十四年ニテハ此國ニ文字ナシサレバ其間書ハ後ニ文字ヲ付タルナレバ字ノ音訓ヲ借リテ其詞ニアテヽアニノ字ニ書タルナリサレバ文字ノ義理ヲ以論スル説ハ古義ニ叶ハザルベシ必シモ字義ニ拘リ泥ムコト勿レ

一懐風藻一巻アリ此書ハ日本人ノ詩ヲ集タリ四十六代孝謙天皇ノ御宇天平勝宝三年ノ撰ベシ撰者ハ詳ナラス此時代ハ唐朝ニ交ヲ使人往来アリ唐ニ旅寓シ彼土ニテ学文ス者モアリシ故詩モ唐風ベシ天平勝宝三年ハ唐朝玄宗皇后ノ代天宝十年ニ當リ楊貴妃盛ニハ寵愛セラレシ比ベ

一十月廿日ニ碁石の妙ニタル餘ベ京師将軍家時代ノ記ニ碁石ハ時代の物ナリ将軍ヨリ碁石ヲ拵ヘ持ツテ来ル時ハ川合中ヨリ金坂泥ニテ菊ノ如ク切ラレ白黑ノ碁石ヲ作シテ餘ニ七ツ宛ヲ入レ

[illegible]

一法勝寺　北壱丙条　[illegible]

釈日本紀ニ大嘗會儀式日巳日奉田舞ヲ共舞

一田儛　同書巻第十四聖武皇帝　天平十四年正月丁未朔壬戌　天皇御ニ天安殿ニ宴ニ群臣ヲ酒酣奏ニ五節田儛ヲ一訖更令ニ少年童女蹈歌又賜ヲ宴ヲ天下有位人ニ兵ニ諸司史生ニ於是六位以下人等鼓琴歌曰新年ノ始メ迩何久志社供奉良来萬代摩提丹宴訖テ賜レ禄ヲ下有差　田儛ハ後代ノ田楽ノ類カ未詳

一起請　ヲコシ請フベ何ニテモ願ヲ起シ請フコトヲスベ　國史ナドニ起請トスル文アルハ是ベ後代拵言言今如此スフ詞ニ違バ神佛ノ罰ヲ蒙ルベシトスル文ヲ起請文トスモ罰ヲ蒙ラントスル願ヲ起シテ罰ヲ佛神ニ請ヒ求ル意ニテ起請トスベ

一副ノ字ハ音　神祇官ノ大副少副将軍又副使ナドニハ音フト

ヨムベシ。フクトヨムカラス王篇ニ芳富ノ切語ヲ載ベシ字彙ニ敷
敝切語ニ載ベシ廣韻ニ佑ベシト是ソヒタスクルノ義ニハ音ヅベ
又王篇ニ普逼ノ切語 析ベシ破ベシトアリ 音フクノ時ハサク ワルトモ義ニナルベシ

一保昌羽風切羽鳥ノ尤右兩翼ヲ右羽ト云 左羽ノ下方
至名長キ子羽ヲ風切羽ト云

一節下ノ大臣平家物語ナ十大章舎ノ事十月三日九日
新帝の出きいの行幸あり内丹き徳大寺トノつとめ
らるおはし 先帝の出きいの行幸ハ丹波内大臣
宗盛公つとめらる 節下の堀河殿ハ帝下の大臣のる ニケ寺
龍の口ニ立ておはしましけり 節下大臣のる ニケ寺
事物ヘあり

うとい法堂関白道長公ノ内室ベ若宮の外祖母ベ北
人法橋等をつぎ給ふ礼しベ 切ルトモ書ルヒ長テ
一穂漢ヲ書あげ給ベ國史続教世継等 古代の実録ヨ
ヲ書あげ給れ事ハ 常の老女なるを
せし事ハ 今世のヲ事ハ世のる
是ハ老女をめしたるふるまひ者ハ
隙の摩ヲ書ふる人を 老女ハ
と云ハ 所ヘ 功者ベ
ヲ書てヲ所ヘ ヲ書ハ
ヲ書てヲ所ヘ ヲ書ハ
服ヲ書ヲ服ヲ動ヲ
ヲ四尺ヲ書ヲ服ヲ
ヲ書ヲ功者ヲ

餘ニ時ニ天災ヨリ生ルセテ如ク人作ヨリ出ル也必然ニ人作ヨリ出ル事ハ
人作ニ交リテ必然ニ人作ヨリ出ル事ハ先ヅ病ヲ起シ人作ヲ悪シ病アリ
服茅ヲ以テ服茅ヲ以テ人作ヲ悪シ病アリ
のゝ中ヲ以テ人ヲ高年ニ天ヨリ
のゝ中ヲ以テ人ヲ高年ニ天ヨリ
一瓦舎　續日本紀巻第九聖武皇帝神亀九年十月太
政官奏言ス上古淳朴冬穴夏巢後世聖人代ルニ以宮室
亦有京師帝王為居万國所朝非是壮麗何ヲ以
表德其板屋草舎中古遺制難營易破空弾民財
請仰有司令五位已上及庶人堪營者構立瓦舎
塗ヲ為赤白奏ス可之

一不負胡禄則著浅沓　沙石集巻二猿楽事緒起
条ニ焼失の後切堤川原武士等陣ヲ参ス子
細ヲ為被召間頼政陣ノ中ニメサル頼政ハ白キ見袈裟
ノ水干小袴藍摺ノ帷著テ立烏帽子ニ太刀帯ヲ
胡禄ヲ不負ハ浅沓ヲハケリ云ヒ此浅沓ノ事其故不
審可尋

一猿楽右同記第三澄憲祈雨ノ条猿楽ト申ハオカシキ事ヲ
云ツヽケテ人ヲ笑ハセシ侍ルゾカシ云ヽ重盛ノ語ル。猿楽ノ
水宮ハ散楽ヽ（サンガクトナル）
一ヘビヅチヘノ字ヽ右同記同条ニ小松内大臣其時ハ新大納
言ニテ雷座ニ候ハレケリ始ヨリ。ヘビヅチレテエモ笑ハズ云云

へらゞチハ物慌バビカラヌ時顔苦カリナ唇ノ形ヘノ字ノ如クナルヲ
ヘ字ノチトカヘ（ヘノ字ニヨリシノ字ヘシテヨスハ非ス）今江戸ノ詞ニベソヲ作ルトカヘ
同ヘゾハ。ヘ字ヘソトレ音相通ナリ（ヘノ字スミソノ字ニヨルヘキヲ得テベソトカヘ習レタリ）

一御菓後取　栄花物語才十つゝ記巻ニ年号如ハ寛
長和二年のころ　寛仁元年　寛仁二年　寛仁三年　寛仁四年　寛仁五年　寛仁六年　寛仁七年
寛仁八年　寛仁九年　寛仁十年　寛仁十一年　寛仁十二年　寛仁十三年　寛仁十四年　寛仁十五年
寛仁十六年　寛仁十七年　寛仁十八年　寛仁十九年　寛仁二十年　寛仁二十一年　寛仁二十二年
寛仁二十三年　寛仁二十四年　寛仁二十五年　寛仁二十六年　寛仁二十七年　寛仁二十八年
寛仁二十九年　寛仁三十年　寛仁三十一年　寛仁三十二年　寛仁三十三年　寛仁三十四年
寛仁三十五年　寛仁三十六年　寛仁三十七年　寛仁三十八年　寛仁三十九年　寛仁四十年
寛仁四十一年　寛仁四十二年　寛仁四十三年　寛仁四十四年　寛仁四十五年　寛仁四十六年
寛仁四十七年　寛仁四十八年　寛仁四十九年　寛仁五十年　寛仁五十一年　寛仁五十二年
寛仁五十三年　寛仁五十四年　寛仁五十五年　寛仁五十六年　寛仁五十七年　寛仁五十八年
寛仁五十九年　寛仁六十年　寛仁六十一年　寛仁六十二年　寛仁六十三年　寛仁六十四年
寛仁六十五年　寛仁六十六年　寛仁六十七年　寛仁六十八年　寛仁六十九年　寛仁七十年
寛仁七十一年　寛仁七十二年　寛仁七十三年　寛仁七十四年　寛仁七十五年　寛仁七十六年
寛仁七十七年　寛仁七十八年　寛仁七十九年　寛仁八十年　寛仁八十一年　寛仁八十二年
寛仁八十三年　寛仁八十四年　寛仁八十五年　寛仁八十六年　寛仁八十七年　寛仁八十八年
寛仁八十九年　寛仁九十年　寛仁九十一年　寛仁九十二年　寛仁九十三年　寛仁九十四年
寛仁九十五年　寛仁九十六年　寛仁九十七年　寛仁九十八年　寛仁九十九年　寛仁百年
寛仁百一年　寛仁百二年　寛仁百三年　寛仁百四年　寛仁百五年　寛仁百六年
寛仁百七年　寛仁百八年　寛仁百九年　寛仁百十年　寛仁百十一年　寛仁百十二年
寛仁百十三年　寛仁百十四年　寛仁百十五年　寛仁百十六年　寛仁百十七年　寛仁百十八年
寛仁百十九年　寛仁百二十年　寛仁百二十一年　寛仁百二十二年　寛仁百二十三年　寛仁百二十四年
寛仁百二十五年　寛仁百二十六年　寛仁百二十七年　寛仁百二十八年　寛仁百二十九年　寛仁百三十年
寛仁百三十一年　寛仁百三十二年　寛仁百三十三年　寛仁百三十四年　寛仁百三十五年　寛仁百三十六年
寛仁百三十七年　寛仁百三十八年　寛仁百三十九年　寛仁百四十年　寛仁百四十一年　寛仁百四十二年
寛仁百四十三年　寛仁百四十四年　寛仁百四十五年　寛仁百四十六年　寛仁百四十七年　寛仁百四十八年
寛仁百四十九年　寛仁百五十年　寛仁百五十一年　寛仁百五十二年　寛仁百五十三年　寛仁百五十四年
寛仁百五十五年　寛仁百五十六年　寛仁百五十七年　寛仁百五十八年　寛仁百五十九年　寛仁百六十年
寛仁百六十一年　寛仁百六十二年　寛仁百六十三年　寛仁百六十四年　寛仁百六十五年　寛仁百六十六年
寛仁百六十七年　寛仁百六十八年　寛仁百六十九年　寛仁百七十年　寛仁百七十一年　寛仁百七十二年
寛仁百七十三年　寛仁百七十四年　寛仁百七十五年　寛仁百七十六年　寛仁百七十七年　寛仁百七十八年
寛仁百七十九年　寛仁百八十年　寛仁百八十一年　寛仁百八十二年　寛仁百八十三年　寛仁百八十四年
寛仁百八十五年　寛仁百八十六年　寛仁百八十七年　寛仁百八十八年　寛仁百八十九年　寛仁百九十年
寛仁百九十一年　寛仁百九十二年　寛仁百九十三年　寛仁百九十四年　寛仁百九十五年　寛仁百九十六年
寛仁百九十七年　寛仁百九十八年　寛仁百九十九年　寛仁二百年　寛仁二百一年　寛仁二百二年
寛仁二百三年　寛仁二百四年　寛仁二百五年　寛仁二百六年　寛仁二百七年　寛仁二百八年
寛仁二百九年　寛仁二百十年　寛仁二百十一年　寛仁二百十二年　寛仁二百十三年　寛仁二百十四年
寛仁二百十五年　寛仁二百十六年　寛仁二百十七年　寛仁二百十八年　寛仁二百十九年　寛仁二百二十年
寛仁二百二十一年　寛仁二百二十二年　寛仁二百二十三年　寛仁二百二十四年　寛仁二百二十五年
寛仁二百二十六年　寛仁二百二十七年　寛仁二百二十八年　寛仁二百二十九年　寛仁二百三十年
寛仁二百三十一年　寛仁二百三十二年　寛仁二百三十三年　寛仁二百三十四年　寛仁二百三十五年
寛仁二百三十六年　寛仁二百三十七年　寛仁二百三十八年　寛仁二百三十九年　寛仁二百四十年
寛仁二百四十一年　寛仁二百四十二年　寛仁二百四十三年　寛仁二百四十四年　寛仁二百四十五年
寛仁二百四十六年　寛仁二百四十七年　寛仁二百四十八年　寛仁二百四十九年　寛仁二百五十年
寛仁二百五十一年　寛仁二百五十二年　寛仁二百五十三年　寛仁二百五十四年　寛仁二百五十五年
寛仁二百五十六年　寛仁二百五十七年　寛仁二百五十八年　寛仁二百五十九年　寛仁二百六十年
寛仁二百六十一年　寛仁二百六十二年　寛仁二百六十三年　寛仁二百六十四年　寛仁二百六十五年
寛仁二百六十六年　寛仁二百六十七年　寛仁二百六十八年　寛仁二百六十九年　寛仁二百七十年
寛仁二百七十一年　寛仁二百七十二年　寛仁二百七十三年　寛仁二百七十四年　寛仁二百七十五年
寛仁二百七十六年　寛仁二百七十七年　寛仁二百七十八年　寛仁二百七十九年　寛仁二百八十年
寛仁二百八十一年　寛仁二百八十二年　寛仁二百八十三年　寛仁二百八十四年　寛仁二百八十五年
寛仁二百八十六年　寛仁二百八十七年　寛仁二百八十八年　寛仁二百八十九年　寛仁二百九十年
寛仁二百九十一年　寛仁二百九十二年　寛仁二百九十三年　寛仁二百九十四年　寛仁二百九十五年
寛仁二百九十六年　寛仁二百九十七年　寛仁二百九十八年　寛仁二百九十九年　寛仁三百年
寛仁三百一年　寛仁三百二年　寛仁三百三年　寛仁三百四年　寛仁三百五年　寛仁三百六年
寛仁三百七年　寛仁三百八年　寛仁三百九年　寛仁三百十年　寛仁三百十一年　寛仁三百十二年
寛仁三百十三年　寛仁三百十四年　寛仁三百十五年　寛仁三百十六年　寛仁三百十七年　寛仁三百十八年
寛仁三百十九年　寛仁三百二十年　寛仁三百二十一年　寛仁三百二十二年　寛仁三百二十三年　寛仁三百二十四年
寛仁三百二十五年　寛仁三百二十六年　寛仁三百二十七年　寛仁三百二十八年　寛仁三百二十九年　寛仁三百三十年
寛仁三百三十一年　寛仁三百三十二年　寛仁三百三十三年　寛仁三百三十四年　寛仁三百三十五年
寛仁三百三十六年　寛仁三百三十七年　寛仁三百三十八年　寛仁三百三十九年　寛仁三百四十年
寛仁三百四十一年　寛仁三百四十二年　寛仁三百四十三年　寛仁三百四十四年　寛仁三百四十五年
寛仁三百四十六年　寛仁三百四十七年　寛仁三百四十八年　寛仁三百四十九年　寛仁三百五十年
寛仁三百五十一年　寛仁三百五十二年　寛仁三百五十三年　寛仁三百五十四年　寛仁三百五十五年
寛仁三百五十六年　寛仁三百五十七年　寛仁三百五十八年　寛仁三百五十九年　寛仁三百六十年
寛仁三百六十一年　寛仁三百六十二年　寛仁三百六十三年　寛仁三百六十四年　寛仁三百六十五年
寛仁三百六十六年　寛仁三百六十七年　寛仁三百六十八年　寛仁三百六十九年　寛仁三百七十年
寛仁三百七十一年　寛仁三百七十二年　寛仁三百七十三年　寛仁三百七十四年　寛仁三百七十五年
寛仁三百七十六年　寛仁三百七十七年　寛仁三百七十八年　寛仁三百七十九年　寛仁三百八十年
寛仁三百八十一年　寛仁三百八十二年　寛仁三百八十三年　寛仁三百八十四年　寛仁三百八十五年
寛仁三百八十六年　寛仁三百八十七年　寛仁三百八十八年　寛仁三百八十九年　寛仁三百九十年
寛仁三百九十一年　寛仁三百九十二年　寛仁三百九十三年　寛仁三百九十四年　寛仁三百九十五年
寛仁三百九十六年　寛仁三百九十七年　寛仁三百九十八年　寛仁三百九十九年　寛仁四百年
寛仁四百一年　寛仁四百二年　寛仁四百三年　寛仁四百四年　寛仁四百五年　寛仁四百六年
寛仁四百七年　寛仁四百八年　寛仁四百九年　寛仁四百十年　寛仁四百十一年　寛仁四百十二年
寛仁四百十三年　寛仁四百十四年　寛仁四百十五年　寛仁四百十六年　寛仁四百十七年　寛仁四百十八年
寛仁四百十九年　寛仁四百二十年　寛仁四百二十一年　寛仁四百二十二年　寛仁四百二十三年　寛仁四百二十四年
寛仁四百二十五年　寛仁四百二十六年　寛仁四百二十七年　寛仁四百二十八年　寛仁四百二十九年　寛仁四百三十年
寛仁四百三十一年　寛仁四百三十二年　寛仁四百三十三年　寛仁四百三十四年　寛仁四百三十五年
寛仁四百三十六年　寛仁四百三十七年　寛仁四百三十八年　寛仁四百三十九年　寛仁四百四十年
寛仁四百四十一年　寛仁四百四十二年　寛仁四百四十三年　寛仁四百四十四年　寛仁四百四十五年
寛仁四百四十六年　寛仁四百四十七年　寛仁四百四十八年　寛仁四百四十九年　寛仁四百五十年
寛仁四百五十一年　寛仁四百五十二年　寛仁四百五十三年　寛仁四百五十四年　寛仁四百五十五年
寛仁四百五十六年　寛仁四百五十七年　寛仁四百五十八年　寛仁四百五十九年　寛仁四百六十年
寛仁四百六十一年　寛仁四百六十二年　寛仁四百六十三年　寛仁四百六十四年　寛仁四百六十五年
寛仁四百六十六年　寛仁四百六十七年　寛仁四百六十八年　寛仁四百六十九年　寛仁四百七十年
寛仁四百七十一年　寛仁四百七十二年　寛仁四百七十三年　寛仁四百七十四年　寛仁四百七十五年
寛仁四百七十六年　寛仁四百七十七年　寛仁四百七十八年　寛仁四百七十九年　寛仁四百八十年
寛仁四百八十一年　寛仁四百八十二年　寛仁四百八十三年　寛仁四百八十四年　寛仁四百八十五年
寛仁四百八十六年　寛仁四百八十七年　寛仁四百八十八年　寛仁四百八十九年　寛仁四百九十年
寛仁四百九十一年　寛仁四百九十二年　寛仁四百九十三年　寛仁四百九十四年　寛仁四百九十五年
寛仁四百九十六年　寛仁四百九十七年　寛仁四百九十八年　寛仁四百九十九年　寛仁五百年
寛仁五百一年　寛仁五百二年　寛仁五百三年　寛仁五百四年　寛仁五百五年　寛仁五百六年
寛仁五百七年　寛仁五百八年　寛仁五百九年　寛仁五百十年　寛仁五百十一年　寛仁五百十二年
寛仁五百十三年　寛仁五百十四年　寛仁五百十五年　寛仁五百十六年　寛仁五百十七年　寛仁五百十八年
寛仁五百十九年　寛仁五百二十年　寛仁五百二十一年　寛仁五百二十二年　寛仁五百二十三年　寛仁五百二十四年
寛仁五百二十五年　寛仁五百二十六年　寛仁五百二十七年　寛仁五百二十八年　寛仁五百二十九年　寛仁五百三十年
寛仁五百三十一年　寛仁五百三十二年　寛仁五百三十三年　寛仁五百三十四年　寛仁五百三十五年
寛仁五百三十六年　寛仁五百三十七年　寛仁五百三十八年　寛仁五百三十九年　寛仁五百四十年
寛仁五百四十一年　寛仁五百四十二年　寛仁五百四十三年　寛仁五百四十四年　寛仁五百四十五年
寛仁五百四十六年　寛仁五百四十七年　寛仁五百四十八年　寛仁五百四十九年　寛仁五百五十年
寛仁五百五十一年　寛仁五百五十二年　寛仁五百五十三年　寛仁五百五十四年　寛仁五百五十五年
寛仁五百五十六年　寛仁五百五十七年　寛仁五百五十八年　寛仁五百五十九年　寛仁五百六十年
寛仁五百六十一年　寛仁五百六十二年　寛仁五百六十三年　寛仁五百六十四年　寛仁五百六十五年
寛仁五百六十六年　寛仁五百六十七年　寛仁五百六十八年　寛仁五百六十九年　寛仁五百七十年
寛仁五百七十一年　寛仁五百七十二年　寛仁五百七十三年　寛仁五百七十四年　寛仁五百七十五年
寛仁五百七十六年　寛仁五百七十七年　寛仁五百七十八年　寛仁五百七十九年　寛仁五百八十年
寛仁五百八十一年　寛仁五百八十二年　寛仁五百八十三年　寛仁五百八十四年　寛仁五百八十五年
寛仁五百八十六年　寛仁五百八十七年　寛仁五百八十八年　寛仁五百八十九年　寛仁五百九十年
寛仁五百九十一年　寛仁五百九十二年　寛仁五百九十三年　寛仁五百九十四年　寛仁五百九十五年
寛仁五百九十六年　寛仁五百九十七年　寛仁五百九十八年　寛仁五百九十九年　寛仁六百年
寛仁六百一年　寛仁六百二年　寛仁六百三年　寛仁六百四年　寛仁六百五年　寛仁六百六年
寛仁六百七年　寛仁六百八年　寛仁六百九年　寛仁六百十年　寛仁六百十一年　寛仁六百十二年
寛仁六百十三年　寛仁六百十四年　寛仁六百十五年　寛仁六百十六年　寛仁六百十七年　寛仁六百十八年
寛仁六百十九年　寛仁六百二十年　寛仁六百二十一年　寛仁六百二十二年　寛仁六百二十三年　寛仁六百二十四年
寛仁六百二十五年　寛仁六百二十六年　寛仁六百二十七年　寛仁六百二十八年　寛仁六百二十九年　寛仁六百三十年
寛仁六百三十一年　寛仁六百三十二年　寛仁六百三十三年　寛仁六百三十四年　寛仁六百三十五年
寛仁六百三十六年　寛仁六百三十七年　寛仁六百三十八年　寛仁六百三十九年　寛仁六百四十年
寛仁六百四十一年　寛仁六百四十二年　寛仁六百四十三年　寛仁六百四十四年　寛仁六百四十五年
寛仁六百四十六年　寛仁六百四十七年　寛仁六百四十八年　寛仁六百四十九年　寛仁六百五十年
寛仁六百五十一年　寛仁六百五十二年　寛仁六百五十三年　寛仁六百五十四年　寛仁六百五十五年
寛仁六百五十六年　寛仁六百五十七年　寛仁六百五十八年　寛仁六百五十九年　寛仁六百六十年
寛仁六百六十一年　寛仁六百六十二年　寛仁六百六十三年　寛仁六百六十四年　寛仁六百六十五年
寛仁六百六十六年　寛仁六百六十七年　寛仁六百六十八年　寛仁六百六十九年　寛仁六百七十年
寛仁六百七十一年　寛仁六百七十二年　寛仁六百七十三年　寛仁六百七十四年　寛仁六百七十五年
寛仁六百七十六年　寛仁六百七十七年　寛仁六百七十八年　寛仁六百七十九年　寛仁六百八十年
寛仁六百八十一年　寛仁六百八十二年　寛仁六百八十三年　寛仁六百八十四年　寛仁六百八十五年
寛仁六百八十六年　寛仁六百八十七年　寛仁六百八十八年　寛仁六百八十九年　寛仁六百九十年
寛仁六百九十一年　寛仁六百九十二年　寛仁六百九十三年　寛仁六百九十四年　寛仁六百九十五年
寛仁六百九十六年　寛仁六百九十七年　寛仁六百九十八年　寛仁六百九十九年　寛仁七百年
寛仁七百一年　寛仁七百二年　寛仁七百三年　寛仁七百四年　寛仁七百五年　寛仁七百六年
寛仁七百七年　寛仁七百八年　寛仁七百九年　寛仁七百十年　寛仁七百十一年　寛仁七百十二年
寛仁七百十三年　寛仁七百十四年　寛仁七百十五年　寛仁七百十六年　寛仁七百十七年　寛仁七百十八年
寛仁七百十九年　寛仁七百二十年　寛仁七百二十一年　寛仁七百二十二年　寛仁七百二十三年　寛仁七百二十四年
寛仁七百二十五年　寛仁七百二十六年　寛仁七百二十七年　寛仁七百二十八年　寛仁七百二十九年　寛仁七百三十年
寛仁七百三十一年　寛仁七百三十二年　寛仁七百三十三年　寛仁七百三十四年　寛仁七百三十五年
寛仁七百三十六年　寛仁七百三十七年　寛仁七百三十八年　寛仁七百三十九年　寛仁七百四十年
寛仁七百四十一年　寛仁七百四十二年　寛仁七百四十三年　寛仁七百四十四年　寛仁七百四十五年
寛仁七百四十六年　寛仁七百四十七年　寛仁七百四十八年　寛仁七百四十九年　寛仁七百五十年
寛仁七百五十一年　寛仁七百五十二年　寛仁七百五十三年　寛仁七百五十四年　寛仁七百五十五年
寛仁七百五十六年　寛仁七百五十七年　寛仁七百五十八年　寛仁七百五十九年　寛仁七百六十年
寛仁七百六十一年　寛仁七百六十二年　寛仁七百六十三年　寛仁七百六十四年　寛仁七百六十五年
寛仁七百六十六年　寛仁七百六十七年　寛仁七百六十八年　寛仁七百六十九年　寛仁七百七十年
寛仁七百七十一年　寛仁七百七十二年　寛仁七百七十三年　寛仁七百七十四年　寛仁七百七十五年
寛仁七百七十六年　寛仁七百七十七年　寛仁七百七十八年　寛仁七百七十九年　寛仁七百八十年
寛仁七百八十一年　寛仁七百八十二年　寛仁七百八十三年　寛仁七百八十四年　寛仁七百八十五年
寛仁七百八十六年　寛仁七百八十七年　寛仁七百八十八年　寛仁七百八十九年　寛仁七百九十年
寛仁七百九十一年　寛仁七百九十二年　寛仁七百九十三年　寛仁七百九十四年　寛仁七百九十五年
寛仁七百九十六年　寛仁七百九十七年　寛仁七百九十八年　寛仁七百九十九年　寛仁八百年
寛仁八百一年　寛仁八百二年　寛仁八百三年　寛仁八百四年　寛仁八百五年　寛仁八百六年
寛仁八百七年　寛仁八百八年　寛仁八百九年　寛仁八百十年　寛仁八百十一年　寛仁八百十二年
寛仁八百十三年　寛仁八百十四年　寛仁八百十五年　寛仁八百十六年　寛仁八百十七年　寛仁八百十八年
寛仁八百十九年　寛仁八百二十年　寛仁八百二十一年　寛仁八百二十二年　寛仁八百二十三年　寛仁八百二十四年
寛仁八百二十五年　寛仁八百二十六年　寛仁八百二十七年　寛仁八百二十八年　寛仁八百二十九年　寛仁八百三十年
寛仁八百三十一年　寛仁八百三十二年　寛仁八百三十三年　寛仁八百三十四年　寛仁八百三十五年
寛仁八百三十六年　寛仁八百三十七年　寛仁八百三十八年　寛仁八百三十九年　寛仁八百四十年
寛仁八百四十一年　寛仁八百四十二年　寛仁八百四十三年　寛仁八百四十四年　寛仁八百四十五年
寛仁八百四十六年　寛仁八百四十七年　寛仁八百四十八年　寛仁八百四十九年　寛仁八百五十年
寛仁八百五十一年　寛仁八百五十二年　寛仁八百五十三年　寛仁八百五十四年　寛仁八百五十五年
寛仁八百五十六年　寛仁八百五十七年　寛仁八百五十八年　寛仁八百五十九年　寛仁八百六十年
寛仁八百六十一年　寛仁八百六十二年　寛仁八百六十三年　寛仁八百六十四年　寛仁八百六十五年
寛仁八百六十六年　寛仁八百六十七年　寛仁八百六十八年　寛仁八百六十九年　寛仁八百七十年
寛仁八百七十一年　寛仁八百七十二年　寛仁八百七十三年　寛仁八百七十四年　寛仁八百七十五年
寛仁八百七十六年　寛仁八百七十七年　寛仁八百七十八年　寛仁八百七十九年　寛仁八百八十年
寛仁八百八十一年　寛仁八百八十二年　寛仁八百八十三年　寛仁八百八十四年　寛仁八百八十五年
寛仁八百八十六年　寛仁八百八十七年　寛仁八百八十八年　寛仁八百八十九年　寛仁八百九十年
寛仁八百九十一年　寛仁八百九十二年　寛仁八百九十三年　寛仁八百九十四年　寛仁八百九十五年
寛仁八百九十六年　寛仁八百九十七年　寛仁八百九十八年　寛仁八百九十九年　寛仁九百年
寛仁九百一年　寛仁九百二年　寛仁九百三年　寛仁九百四年　寛仁九百五年　寛仁九百六年
寛仁九百七年　寛仁九百八年　寛仁九百九年　寛仁九百十年　寛仁九百十一年　寛仁九百十二年
寛仁九百十三年　寛仁九百十四年　寛仁九百十五年　寛仁九百十六年　寛仁九百十七年　寛仁九百十八年
寛仁九百十九年　寛仁九百二十年　寛仁九百二十一年　寛仁九百二十二年　寛仁九百二十三年　寛仁九百二十四年
寛仁九百二十五年　寛仁九百二十六年　寛仁九百二十七年　寛仁九百二十八年　寛仁九百二十九年　寛仁九百三十年
寛仁九百三十一年　寛仁九百三十二年　寛仁九百三十三年　寛仁九百三十四年　寛仁九百三十五年
寛仁九百三十六年　寛仁九百三十七年　寛仁九百三十八年　寛仁九百三十九年　寛仁九百四十年
寛仁九百四十一年　寛仁九百四十二年　寛仁九百四十三年　寛仁九百四十四年　寛仁九百四十五年
寛仁九百四十六年　寛仁九百四十七年　寛仁九百四十八年　寛仁九百四十九年　寛仁九百五十年
寛仁九百五十一年　寛仁九百五十二年　寛仁九百五十三年　寛仁九百五十四年　寛仁九百五十五年
寛仁九百五十六年　寛仁九百五十七年　寛仁九百五十八年　寛仁九百五十九年　寛仁九百六十年
寛仁九百六十一年　寛仁九百六十二年　寛仁九百六十三年　寛仁九百六十四年　寛仁九百六十五年
寛仁九百六十六年　寛仁九百六十七年　寛仁九百六十八年　寛仁九百六十九年　寛仁九百七十年
寛仁九百七十一年　寛仁九百七十二年　寛仁九百七十三年　寛仁九百七十四年　寛仁九百七十五年
寛仁九百七十六年　寛仁九百七十七年　寛仁九百七十八年　寛仁九百七十九年　寛仁九百八十年
寛仁九百八十一年　寛仁九百八十二年　寛仁九百八十三年　寛仁九百八十四年　寛仁九百八十五年
寛仁九百八十六年　寛仁九百八十七年　寛仁九百八十八年　寛仁九百八十九年　寛仁九百九十年
寛仁九百九十一年　寛仁九百九十二年　寛仁九百九十三年　寛仁九百九十四年　寛仁九百九十五年
寛仁九百九十六年　寛仁九百九十七年　寛仁九百九十八年　寛仁九百九十九年　寛仁十百年
寛仁十百一年　寛仁十百二年　寛仁十百三年　寛仁十百四年　寛仁十百五年　寛仁十百六年
寛仁十百七年　寛仁十百八年　寛仁十百九年　寛仁十百十年　寛仁十百十一年　寛仁十百十二年
寛仁十百十三年　寛仁十百十四年　寛仁十百十五年　寛仁十百十六年　寛仁十百十七年　寛仁十百十八年
寛仁十百十九年　寛仁十百二十年　寛仁十百二十一年　寛仁十百二十二年　寛仁十百二十三年　寛仁十百二十四年
寛仁十百二十五年　寛仁十百二十六年　寛仁十百二十七年　寛仁十百二十八年　寛仁十百二十九年　寛仁十百三十年
寛仁十百三十一年　寛仁十百三十二年　寛仁十百三十三年　寛仁十百三十四年　寛仁十百三十五年
寛仁十百三十六年　寛仁十百三十七年　寛仁十百三十八年　寛仁十百三十九年　寛仁十百四十年
寛仁十百四十一年　寛仁十百四十二年　寛仁十百四十三年　寛仁十百四十四年　寛仁十百四十五年
寛仁十百四十六年　寛仁十百四十七年　寛仁十百四十八年　寛仁十百四十九年　寛仁十百五十年
寛仁十百五十一年　寛仁十百五十二年　寛仁十百五十三年　寛仁十百五十四年　寛仁十百五十五年
寛仁十百五十六年　寛仁十百五十七年　寛仁十百五十八年　寛仁十百五十九年　寛仁十百六十年
寛仁十百六十一年　寛仁十百六十二年　寛仁十百六十三年　寛仁十百六十四年　寛仁十百六十五年
寛仁十百六十六年　寛仁十百六十七年　寛仁十百六十八年　寛仁十百六十九年　寛仁十百七十年
寛仁十百七十一年　寛仁十百七十二年　寛仁十百七十三年　寛仁十百七十四年　寛仁十百七十五年
寛仁十百七十六年　寛仁十百七十七年　寛仁十百七十八年　寛仁十百七十九年　寛仁十百八十年
寛仁十百八十一年　寛仁十百八十二年　寛仁十百八十三年　寛仁十百八十四年　寛仁十百八十五年
寛仁十百八十六年　寛仁十百八十七年　寛仁十百八十八年　寛仁十百八十九年　寛仁十百九十年
寛仁十百九十一年　寛仁十百九十二年　寛仁十百九十三年　寛仁十百九十四年　寛仁十百九十五年
寛仁十百九十六年　寛仁十百九十七年　寛仁十百九十八年　寛仁十

之ヲ片ヲトキ七ヲ〆テ片カナノ訓ノ一ヲトツテ
三ツヲトキ六ヲ〆テ片カナノ訓ノ一ヲトツテ
十八サイヲトキ五ヲ〆テ片カナノ訓ノ一ヲトツテ
所ヲ知ラズ

一助假名經典ノ文字傍ニ訓讀ノ為ニ假名ヲ付ルヲステガナト云ハ非ベスケガナト云ヘシ訓ノ動用ヲ助クルベタトヘバ婦ノ字ノ傍ニ〇メト付ケ〇ムルト付ルノ類ナリ 上代ノ人ハ〇シリカナト云訓ノ後ニ付ル意ナルベシカヘリ点〇シ然ルニ今ハ付ルヲ古キ字本ハ〇ノ如ク付テアリ是ヲカリカ子点ト云何書ヤランニアリ方忘レタリ 古代ハ〇スケガナ付ケコナシ〇ヲコト点ヲ付テヨミ習タリ〇片カナヲ以テスケカナヲ付ルハ何ノ比ヨリ始ルヤ詳ナラズ文明比ヨリモ尚サキノ比ヨリアル欤 大學寮亡ヒシヨリ〇ヲコト点付テヨムヿ絶シテ片カナノスケカナハ起ルナラン欤

一戴餓栄物語十二つ有り此の巻にとちのめ〻ア乃セ芽らせ乃ふとてきしゆくきまて〻いのうしたる者ともおもふ〻よ作人ハ元祐ん女ずものつぶちさめ迄うつえ乃ふ乃ふ乃ふ乃ふ乃ふ乃ふ乃ふ乃ふ乃ふ乃ふ

長和三年ベ 去年中ハ〻ハ〻ハ〻ハ〻ハ〻ハ〻ハ〻ハ〻ハ〻ハ〻

一姫文捧花風十二巻の物語長和五年の奈元の文井寛年三よりふせる〻ハ四月より広ちう中紀のすけ〻し今ハ〻つ〻もあるちゝさ紀広具ちゝいう〻ち女子紙絵

一ろんと云詞 なりしとゝ〻人ろん乃ろ又ハのゝ乃ろなんの教ゝ〻助詞ろて何ノ意ノ義ハ宣命ノ詞ニハ奈毛と

何りちんと云こ同し

一上日　上日ノ二字ツカフル日トヨム　佐日ハ今武家ニテ当番ハ平家物語ニ上日ノ者ヲ召仕フトアルハ清盛大禄ヲ頒レ家臣人数多キ故五日当番非番ヲワケテ当番ノ者ヲ召供フト云フナリ又直日ト云宿直ノ直ナリ

一上夜　上夜ハ今武家ニテ当番ハ泊リ番ハ夜ノ当番ハ又当夜ト云宿直ノ宿ナリ

一宿直　北二字トノヰトヨム　殿居ハ当番ニテ御殿ニ居ハ盈居ルヲ直ト云　夜泊リ番ニテ居ルヲ宿ト云

一繪カキ花月タル童　平家物語大平記等ニ見メリ　牛飼童小舎人童ナドノキル将衣水干ナドキ繪カキ彩色シ又作花

ヲ潛ダル是ヲ月ケ物ト云ナリコレ一日晴ノ風流ニスルナリ　四月賀茂祭ノ日勅使ノ下部検非違使ノ放免ナド付ケ物ヲスルハ作花ノミニ限ラズ何ニテモ主人ノ好ニカセテ作リ物ヲシテト月ケベシ草ニ放免ノツケ物トアルハ是ナリ

放免検非違使ノ廳ノ下部ナリ

一大和國　神代ハ皇都ニテ其ノ國高天山高天野アリ是ハ高天原ト故ニ神代ニハ同國天香山ニ所生ノ物ヲ取テ諸用備ヘタリ　天ノ香具天香山栲ノ木天香山ノ銅天香山ノ賢木天香山ノ真男鹿天香山ノ波々迦等是也日本紀古事記古訪拾遺等ヲ見テ可考本ハ天ノ高ノ廣キヲ高天原ト云フニ依テ皇都ヲ貴ミテ大ニテソラヘテ高天原ト称シタル歟中ヲ雲ノ上ト云ニ同シヤウト、云ハ天和國ハ大山アル國ト其山アル處ニ

皇都ノ故ニヤマトカ。トヽカ止ヒ乞君原甚山ニ宮室ヲ建テ坐リ
住ム故ニトヽカ。トヽハ其都ヲカヽ神代ニハ文字ナシ唯ノチニテ
ヤマト、カ名ノミニテ和倭日本山跡等ノ文字ハ後ニ付タル
ヽ後ニ文字ヲ付ルニ和ノ字ヲ用ルハ皇都ナル故中和ノ義ヲ
以テ和字ヲ用ルヽ大ノ字ハ皇都ヲ貴テ廣大ニスルノ称
ヽ西土ニテ大唐大宋大明トカガ如シ大和ハ皇都ニテ外ノ
國ヽハ其下ニ列スル故大和ヲ以テ日本ノ惣号ニモスルヘ神
代ニ根ノ國トカハ大和ノ國ノ外ノ國ヲカ彼山ノ根ヲ造ル國
々ヽ其根ノ國々ノ中ニモ猶遠ニ遠キ國ヲ底國トカ底ノ
國モ根ノ國ノ中ナル故根國底國トツケテカナリ根國底國
ハ八大地獄ヲカトノ説モヒハ多シ（景記等ト）

一蚯蚓書　采花物語十三中ふるてのまきに

せさせ給ふ事ども　いとこまかにかきたる物の
ほとりにはまことにはかりもしられず
りうりうとえすがきにたる紀人のふみ書とかふ文字
のごとしとかいとかしこくあてしは
ものしるかくるかしこ　唐の国の書にの
たまふなるのてい貴の字のかたちにて
ゆゑなくとかいふなるべし

一烏帽子絵

注吉慶舟図ニ一遍上人繪巻物ニ如此烏帽子ニ絵ヲ付タル繪アリ是ハイカナル事ニテ候ヤ養カエホシ緒ヲ内ヨリ外ヘ引出シ緒ノサキヲニツニツケテフサノ如クニ子ラメテ緒ヲトメタルナリ

一曽我物語ニ曽我物語ハ惟高惟仁位爭の章ニ[illegible]
[illegible]
[illegible]

世民既琴瑟あり特に先の代にあり書し
なりしかども本文庖抄云中国歌の部第九
おもふに藤香の撰とおぼゆれども人は大臣公任中務の
三つの風を生ずと宣へり藤香の撰なれば
ただ八風を用ひ給ふなり

一まづし多我抄云一説に所のふるとやそ山
のまつかぜとよりもよさつ行て志賀の水うみんでも
なほ一のまづしきは大臣の小弟や二のまづしきはやつこ
の三郎てがれなれば何のまづしきにか扨て立ちりうちく
まづしい伏兵とすちづしとは特代し
為朱雀の風は陽にかれし伏兵歌の風を得
ちて打ち出るなり

一桐壺帝　利木壺帝藤壺帝梅壺帝帝とは帝の御
代なり例なき事なり源氏抄云桐つぼのみかどは
何の人の妻ぞと世人の言ふ洋周の国の妻なりと云
例のなきもの也桐壺帝の桐壺は
しなん衣と玉鬘巻に桐壺帝と云
れい桐壺のみかどとあるも抄云
一女房衣置口紙　栄花抄云御堂の巻いろくのもの
らのみしきものなどなりし紙ちよいちろ紙
こうものの紙ちめんとのうちとうちや
金箔して紙に和ちよちはけ立物ちうし紙
い青見色紙に紙ひ青見て紙ひ作りたりと云抄

一和琴　帽長朋義及物云　和琴の起りは唐土の伏羲氏の琴
を以て天地神祇を祭りしものなり　人皇十五代の
紀伊国文の中より張と申て清浄神楽料と書り
とぞいふなり　琴の音は清く物の沉いをそ
掻て書る物　掛物は年貢米納めもとる物
真文掛物は物掛りは遠くを吟物の料に作る
なり　水鳥うつめの料より出る物を作る
なり

一人丸墓　友月書云　人丸のもとは大和国住吉郡の人
人麿のもとは近江国住吉郡の人
なりとぞいふなる

一ちま紀柱　友月書云　業平の中将の前に立の所に
南方金剛峯寺　厚（高野木ヲ）　おのれは　ちまちまと作りき柱を
ちまの人社なりとぞ　柱といふ物を作りたるといふの比
の人社なりとぞ　ちまの柱のもとは　ちまなる
作りしちまとぞ　ちまとは　根　ちまなる風と
とは　ちまは　中比時代　なりとぞ
なりとぞ　ちまとは　ちまの
ちまは四角柱　特別の柱
紀柱　ふは丸柱　なり
まるとは　ちまは
四角なるがちまとぞ　ちまは丸なるを云

[illegible]て[illegible]て白と切し　片白ヲツケテハ　ちまたい
茅の葉にて包み巻き餅かな　生餅の形細長く九
[illegible]れ丸柱ともち紀柱ともなるべし

一脇差　脇差は本は隠剣にて長サ二七寸斗消もなく柄も
巻き様懐中に隠して脇よりさし　脇ヲ守ル心なり山鹿の
比脇刀の代に絞りにして懐よりさしてあるべし
[illegible]と　真親教訓書に　[illegible]長秀者の比
[illegible]しの寸法長さ[illegible]て[illegible]巻て折
刀のつかよりしてさきを本は[illegible]
[illegible]ていい刀[illegible]
[illegible]
[illegible]

一車ノ牛飛　平家物語中八[illegible]本宮ハ車の内にてあるべき紀
[illegible]中書牛飼[illegible]中[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]牛童車ノ門外遣ル出テ後ニ一搭アテヌトハ餌ヲタ
[illegible]強牛逸物ニ河内帯カアルベキナレハ如飛走ル水曹車内ニ
サカ様ニロブ中書牛飼ハ今ハ中直リセントモ思テワレニ候ヲ御
牛飛ニ取付カセ給ヘト教ケレバイヅクヨリ牛飛トモ知ラズゲニ
見エケル時ニ其レニ候ハ方立ノ穴ニ取付セ給ヘトヽ時初テ取
付テアハレ支度ヤ是ハ牛ユテイガ支度カ又主ノ殿ノ搆カト
ソ問タリケルヽ兼久記実朝公建保七年正月廿七日

右大臣特賀ノタメ鶴岡八幡宮ヘ参詣ノ事ヲ記シ名条ニ若宮参
リツカセ給ヒテ車ヨリオリサセ給ヒケルガ細太刀柄車ノ牛ガタニ
入タリケル知ラセ給ハデオ折ラセ給ヒヌカヽ、

一牛コデイ右ニ見タリ本曽義仲ガ牛飼トカコヲ知ラズシテ牛コデイ
トカタルヽ牛コデイハ牛健兒ヽ健兒トヨム中間ヲカヽヘ健兒
所ニハ中間之居處ト下学抄ニヘタリ牛コデイヲ俗本ニコノ字ニ
濁ヲナレタルハ非ヽテノ字ヲ濁ルヘシ

一奥蘗 此二字ノ下ノ大ハ大者ヲ大ヽ毛奥蘗ヽヽ篆字
ヽテハ象形ノ乃字ヽテ毛形ヽヽヽ

もちろんれとうく（大良家の炊カ考慮）りき生てしのちうと物の事よ分てハ
今世の物信者うてちきこれ事よ紅皆ちでうて将来ちる
正物ゑてし将と考紀おろしも病人よのまするのり
ばるうや

一ちうとせ方国書ハ方逆のめ孔ちもうとせよりでうて中裏
うのちうきたうちきうとも紀てうて此ちうとせりくうちき
ハ巫（カンナギ）べ（今ふいちこのうそり）

一貝を作て注今著物及巻（世行医作家作者ノ誤ノ諸）新とかとおりあて貝を
つうて注りうく按貝をつうてハ注者の尺の形蛤貝の
形○武ちうべノ字の形ノ形より泥りへ字クチノ条参
考スベシ又俗ゴクヒヲヤゲテ注トも蛤貝ガヒヲ挙テトちう

ナルベシ

一刀服差帯天文年中武田信玄武器制作ノヲ諸侯命
レテ論サヲ記サレメシ書ニ武具要説ト云書アリ其中ニ刀服
差長短得失ノ論アリ信玄ノ比ヨリ大小ヲサスヲ起ルト見エ
戦国風俗今傳ハレルナリ

一ナカ〳〵ト云詞哥ノ詞ニモ席ノ詞ニモナカ〳〵ト云詞アリ哥抄
物ナドニモ義ヲ解カズナカ〳〵ハ中々ノ字ニハアラズ詞ニ付テ中くり
二字ヲアテ字ニ用ルヒナカ〳〵ハ。ナカしくト云ヲニテナカしくハ。ト云フ
ヲナカしくノ略語ニ文字ニハ莫言ヲトモ勿論スルモ書ヘ上哥ニ
遠事の絶てしばくハなりくよくとも多ちふけさとまし
此ハ遠事のつまりしとうるのすると遠ふしいるのまして

[illegible]

[illegible]

[illegible]

和語ニ雖詰約詰延詰轉詰アルヲ皆其調ニ附テ[illegible]字ヲ用ヒ[illegible]字ニハ[illegible]解シ[illegible]雖詰約詰延詰

特ニ漢語ニ[illegible]

一おろかなりや　豈度乎（アニハカランヤ）　豈慮乎（ニヤ）

一[illegible]　豈忘乎（レヤ）と言

一譯和哥漢字ヲ以テ和哥ヲ譯スルニ譯セラレザル一ツアリ之カケ

テニハ、譯シガタシ。タトヘハ。[illegible]人を松保の浦と云ハ待と

松[illegible]て一詰兩意ヲ含ムヿ[illegible]

漢字譯セラレハ二語トナリて去ル去ヲ含ムコトナシ

是和漢ノ[illegible]故ニ[illegible]

[illegible]譯ニ[illegible]注釈ヲ加ヘ

[illegible]通ル[illegible]

浦の波

待未来人松保浦晩風止焼藻煮潮身亦焦身

亦焦（ツヤ）ハ重詰（ナケレハ不叶）　右待松二言ナル

[illegible]

春夜枕肘如暫夢可惜無益得虚名（肘無益ノ益ニ言ハル）

又云譯ニハ哥詰ヲ轉倒セサレバ義通シカタキコトアリ又一両字ヲ添ザレハ義通シカタキコトアリ哥詰ニ隨テ序ヲ置ケバ義通ザルコアリ又云枕詞アル哥モ譯シ難シあし引の山ちハやふる神久うゝめ者れ松ゝ詩ハ漢語ノ文ふしゝ〻と和哥ハ和語ノ文ニスルヽ其文ノ様和漢同カラズ

一朽木形ノ几帳 景元物語ニ四つゝの巻ゝ言餘時客ゝ〻その日室房うきゝ〻ゝてゝいろ〻〻ゝ山九帳ゝ〻ゝきゝ〻れいゝしゝのゆやゝ〻ゝめてゝ〻れもこのまゝハもゝれ木もゝふきゝゝやゝとゝゝ〻ゝ〻ゝ月のゝ〻ゝゝゝ

叶ハズ餘計ト書ヘシカゾヘ餘リトニコヽ

一軍法兵法　軍法トニハ軍中ニテ諸ノ士卒ヲ治ル法度法式ノ定メヽ兵法トニハ兵士ノ組合セヤウ鳴物ノ相図ノ定坐作進退ノ法式ヽ後代甲列流鎌信流ナドニヨリ軍法トニハ誤ヽ軍術トモニヘシ又劔術ノコヲ兵法トニモ誤ヽ劔術ハ刀術トモニヘシ兵法トニヘカラス

一排仆　宋儒山鹿甚五左衛門義矩甲列流軍術者ヽ聖教要録ヲ著シテ宋儒ヲ排仆セリ　其後荻生惣右衛門茂卿モ宋儒ヲ排仆セリ　山鹿ハ先ニテ荻生ハ後ノ　荻生茂卿伊藤仁齊西家共ニ古学ト号ス宋儒ノ説ヲ用ズ荻生ハ孟子ヲ用ズ伊藤ハ孟子ヲ用ユ

十月十八日

一長明無名抄あるてフりすあつまやとあのり也おりろ太きしのヽてもそくもそ比うちか

一ト部兼右　正五位下天文十四正月十五八十三左兵衛佐同十六三丹波守同廿十九従三位

一二階堂藤政行　文明十七廿六従五位上同十六十二廿五防鴨河使判官　二判問答

ニアリ

墨阪十一代主寫藏記

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan